

偵探瞑

猫羽と

さざなみ
学園



Studio ***46

目次

-光の中で-	1
暝探偵猫羽とさざなみ学園	
狂騒曲 Cメロ	4
綺想曲 ★序曲	13
★①★ 十月	18
★②★ 十一月	27
★③★ 十二月	37
★終曲	47
綺想曲 裏拍 D+	52
回旋曲 ★後日談	54
雨が降れど槍が降れど D+	
☆序奏	58
☆選択	62
★D+	66
-INFOMATION-	74

-光の中で-

探偵って、絶対、事件を解決しなきゃダメ？

こんにちは。わたしは、ウツギ・ネコハという女子高校生です。一応人間だけど、ここ地球じゃない、異世界から留学に来てます。

わたしは人間だから、人間に合う生き方の選択肢を学ぶように、一年でいいから留学に出されました。日本でバイトもする事が約束の一つで、それでこの間まで、親戚のヒトがいるよろず相談所で探偵バイトをしてました。だからこう見えても、女子高校生探偵です。

でももう、そのバイトはやめたはずなんだ。だって今は、学生の本分は青春だから、って。

よく教室を視て回る高校部の校長先生が、テストの補習で遅くまで残るわたしに、今日も優しい声をかけてくれました。

「楡さん、頑張ってるね。勉強もいいけど、私としては、まず青春を頑張ってほしいな」

メッシュの入る灰色の髪をオールバックに、上品な鼠色の背広で、とても若い校長先生。薄い色つき眼鏡と灰色の目が日本人ぽくないけど、わたしはこの校長先生が大好きです。

校長先生はいつも言います。学園物とは、夢の塊。全ての幻想は学園物に通じる、と。「まあ、楡さんに、ラブコメは難しいかな？」

とりあえずこれから、何だか色々おかしい二学期が続くみたい。とても、楽しみです。

暝探偵猫羽とさざなみ学園

狂騒曲 Cメロ

明らかに全てがおかしい時に、自分以外が誰もツッコミを入れない場合は、どうしたら良いのだろうか。ある私立学園を置く小さな都市に閉じ込められて、彼は唸った。

故郷でまだ「この彼」^{ミズキ}でいた頃にも、確か似たような事態があった。その記憶を引き金に「この彼」の記憶が今の彼^{キラ}に溢れ出して、どんな荒療治だ、と毒づく。気付けば学生にされていた学園の、高校部の廊下を駆けた。

「あからさまに変だろ、これ！ 何でオレが、人間界で高校生とかやってんだよ！？」

水輪水燬^{ひわミズキ}。そんな名前で、三年A組。

いったい何故、故郷の異世界で殺戮の天使に殺されたはずの彼^{ミズキ}が、前世^{キラ}まで思い出して息を吹き返しているのだろう。

水燬キラ。今の彼は、そんな風に名乗っていた。キラというのが遥かに昔の彼で、強大な化け物に殺される寸前に得意な呪いの力を使い、親友に憑依したのが発端だった。

弟のように育った親友を、その時はただ、守りたかった。まさかそれから特殊な化け物である親友が、何千年も時を超える暮らしをするとは思っていなかった。彼も親友と共に結局現代まで残った。彼の抜殻は水燬という少年に生まれ変わり、呪いの抜殻であるため魔物になった。そして殺されてしまった。

それでも紆余曲折あって、親友の妹が彼を見つけて、彼の抜殻の内に戻したことで彼は目覚めた。色々なびつな生き物ではあるので、親友の妹から血を貰わないと生きていけない。その妹が人間界に留学している間、彼は家事手伝いとして下宿のマンションに通っていた。その矢先に突然、この謎の「さざなみ学園」。

三年A組の教室を出て、廊下の端のD組の扉をがらっと開けた。捏造された学生の記憶など全然ない彼が、唯一思い出せた親友が、その教室にはいるはずだった。

「あ、キラだ。どうしたのさ、そんなに慌てて」

銀髪に青い目が学生服に全く似合わない、明るい顔の親友がいた。それもおかしかった。

「オマエ……ひ、火割^{ひぐれ}！？」

「？ キラ、面白い顔してる。あ、ここでは、水輪水燬だっけ？」

赤い制服の親友は、陽気でも強気に笑う。いつも穏やかで基本朴訥で、素の顔はとても無気力な親友とは偉く違う。その上に親友の和名までが、微妙に記憶を変えられている。「てか、誰だよ火割って！ そもそもオマエ、翼^{よくる}と汐^{しお}ノ香^{のか}を探しに行ったはずだろ！？」

「——」

放課後なので、教室にいる人間は少ない。それでも親友は笑顔のままで辺りを見回し、ちょっと場所を変えよ、と綺麗に笑った。

誰、コイツ。彼は改めて、寒気がしていた。

気が付けば自分だけがおかしな世界にいる。故郷にいた時の同じ事変は、「自分の生まれた世界こそ有り得ない夢」と彼が気付く、夢を終わらせたはずだった。その時彼はちょうど殺戮の天使に殺され、彼が死ぬ世界を消してしまうための行動でもあった。「キラって、見た目お茶らけなのに、ほんとマジメだよな。キラだけ気付くのは解ってたけど、早速ツッコミ入れに来る？」

彼を連れて、終始笑顔の親友は屋上に出た。銀髪の青目と赤目、そんな彼らには本当に、ブレザースタイルの学生服が似合っていない。

「ってことは、オマエは自覚あんの？ 火剋」

この「さざなみ学園」が露骨におかしい件。

親友の妹が人間界の高校に留学中なので、百歩譲って、妹が転校していた可能性はある。しかしそこに彼や親友がいる事は有り得そうにない。

「自覚っていうか、黒幕？ こんなキラまで巻き込んだ大波、俺でないと起こせないし」「いきなり犯人が自白するなよ！ オマエにどうやってこんな学園、用意できんだよ！？」

えへへ、と親友は楽しそうだ。その無邪気さも、彼の知る弟分とは違う。

一言でいうなら、目力がある。自信を宿す熱い光が、幸せそうに彼を見つめる。

親友にとってはこれが、彼との真の再会であると、この時の彼は何も知らなかった。

故郷で殺された彼を、翼橈という吸血鬼の少年と、翼橈が護衛する汐ノ香という天使が、かつて助けようとしていた。そして汐ノ香が行方不明になってしまった。

それは親友が、翼橈の敵対者になったせいだ。彼は親友の妹が殺戮の天使と化したことで殺された。彼の叔父にあたる翼橈は彼を助けようとして殺戮の天使に近付き、汐ノ香とも敵になった。

昔から現状把握が鋭く容赦のない親友は、汐ノ香の陣営にいたので、敵としては強大な翼橈を早くに殺した。それで汐ノ香が翼橈を悪魔にしてまでも蘇生し、汐ノ香本人は行方不明になった。親友はその償いで、汐ノ香を探しに行ったはずだった。

「キラの言う通り、俺が翼橈と一緒に、炎獄に汐ノ香を探しに行ったからさ。だから俺は、ここに出て来られたわけ」

「ほえ？」

「炎獄に追いやられた生け贄は、己に近い生け贄が炎獄に入らないと外に出られない。それがさざなみのルール、って教えられた」

何の話だ。赤い目を丸くする彼に、親友がようやく親友らしい苦しげな笑顔になった。「まあ、運命をちょっと混乱させて遊ぶのがさざなみで、世界ごと変えるのが大波かな。俺は世界が変わったから、存在しなくなった俺。キラが知ってる俺とは違うって言えば、俺が『火剋』なのもキラは納得するだろ？」

急にしおらしくなった親友に、彼は昔からの兄貴癖が出た。哀しいこと言うなよ、と、親友の短髪をわざわざ撫でる。

「何か知らねーけど……さざなみとかいう、運命を変える反則な何かがいるのか？」

うん、と、心地よさそうに親友が答える。

「呪いの魔道とも近いと思うよ。呪いだって、心一つで世界を塗り替える禁忌なんだろう？」

「それはそうだな……じゃあそのさざなみの力を借りて、ユオンがこの学園を創った？」

ううん、と、更に嬉しそうに親友が笑った。

ユオンとは、親友の本当の名だ。目の前にいるのは、彼の知る親友ではないと言われたばかりなのに、つい口をついて出ていた。

「俺は可能性を覗てるだけ。この舞台自体を用意したのは、多分猫羽の夢だよ」

「え？」

猫羽とは、親友の妹の和名だ。猫羽の血が今の彼を辛うじて生かしている。

「猫羽は多分自覚ないし、もしも教えても、夢から起きたがらないと思う。だって俺が、キラに会えるような夢を、あいつは壊さない」

「……—」

親友の目の力は変わっていない。哀しげでありながらも、いつになくよく喋って、己の言い分を曲げそうにない赤い光がそこにある。

「俺とキラは、絶対に再会できないんだよ。だってキラは、この世界にしかないから」

季節は九月の終わりという、秋の夕暮れ。それなのにまだ熱を持った夏の風が、彼らのいる屋上に緩やかに吹き付けてきた。

「キラも知ってるだろ。キラがいる世界は、有り得ない夢だったってこと」

「……」

「そして俺は、最初の世界にしかないから。その後の俺はみんな雨で、最初の俺だけが火。だから火割。俺の世界のキラは、水燬として生まれてくることはないんだよ」

「……じゃあユオンでなく、ヒオンか。って、んなバカなこと、言ってる場合じゃねーし」

何だそれ、と親友が陽気に戻って笑った。とりあえず空気が湿っぽ過ぎて彼が辛かった。

ここにいるのは、彼が知る弟分ではない。けれど「火割」の世界にも彼はいたはずで、雨でも火でも、親友は彼を亡くして辛かっただろう。呪いとしてずっと憑いてはいても、彼自身の心が親友とあったわけではない。

「まあとにかく、キラだけがここは変だってわかるのは、水燬キラはただ一人、この夢の元の世界にしかない存在だから。俺も一人、その世界にはいない奴だから、観測者」

「正直全然、わかんねーけど。それで猫羽が、この夢を創ってる大元？」

「多分そう。有り得ない夢の中で、更に夢を見てる。猫羽は運命の川の混沌の接続者だから、キラ達はみんな、猫羽の夢の中にいる」

昔もこうして、世界レベルの異変の内情を彼はすぐに教えてもらえた。だからあの時は夢を終わらせることができた。

それなら今回はどうするのか。親友は明確に夢の存続を願っているし、彼も昔のように死にそんな状態ではないので、無理に現状を壊さなくてもいいはずなのだ。

「いや、でも……どのツラ下げて帰るんだよ、俺……水燬の記憶、戻らない方が良かった」

「みんな心配してるけどな。たとえ魔物でも、ヒトを沢山傷付けて喰らってきた水燬でも」
うえ、と頭を項垂れてしまう。親友の妹の血で生き繋ぐ今だけでも、彼には申し訳ない思いがあった。しかし過去の彼はそれ以上だ。

「俺も沢山ヒトを殺したよ。もっとクールになれて、いつも怒られてた」

「いや……クールになっても普通に殺すだろ、オマエの場合」

あははは、と嬉しそうに笑う。日本という、殺人が重い罪になる人間界にそぐわない彼ら。

夢だと判っているのならば、深く考えずに楽しめばいい。親友はそう言いたそうだ。
「でもこれ……夢ってことは、猫羽は眠って、夢が続く限りは起きねーってことじゃ……」

「うーん。やっぱりそこに気付くか、キラは」

うーん、じゃねえ。焼け始めた空のように、熱い赤を親友は纏^{まと}う。たとえ大事な妹が犠牲になっても、彼の存在を望むかのように。

とりあえず、親友が説明したことは嘘ではないだろう。彼がこの夢をできるなら覚ますことを願うと解っていても、親友は話した。

彼らはそういう性質なのだ。都合の良い幻に昔から安住できなかった。

「俺は助けも、邪魔もしない。キラの好きなようにしたらいいよ」

「既にヒント、出しまくってんじゃねーか。ほんといい奴だよな、オマエ」

そうかな？ と、親友が今度は不敵に笑う。まるでこの情報を与えたところで、彼には何も変えられないと見据えているかのように。

彼は自分を振り切る意味で、親友と屋上を後にした。迷えばきっとすぐに情が移る。

屋上の扉を外側から開けると、丁度、彼と入れ替わりに癖毛のツインテールの女生徒が屋上に入ってきた。親友に用があるらしい。

親友自身は自覚がないが、昔からモテる。火剣の方もそれは同じようだ。しかしつい今すれ違った女生徒は、様子が少し違った。

扉をしめる前に、女生徒が親友を呼んだ声が聴こえた。これで良かったの？ 烙^{らくと}鍍、と。
「らくと……？」

どうしてだろうか。胸騒ぎに近い嫌な感情が彼の中に沸き上がった。観測者を名乗った親友のことを、親友でない名前と呼ぶ相手。

けれど、夢のことを心配してもきりが無い。後ろ髪を引かれながら階段を降りていった。

＊

荷物を取りに行こうと、三年A組の教室に一度戻った。すると、夢と判っていなければ大いに驚く相手が教室に一人でいた。

「あ、水燬。何処行ってたの、こんな時間に」

「って——汐ノ香……！？」

先程の癖毛の女生徒とは違って、長細い黒のツインテール。精巧に造られた体なので、一見人形と判らないが、永遠に歳を取らない天使の汐ノ香が学生服でそこにいた。

「何よー、放課後に私がここにいちゃダメ？」

「いや……えっと……」

ここは猫羽の夢だと、親友は言った。なら、猫羽と敵対した汐ノ香の存在も有り得るのか。

必死に現状をそのまま呑み込む。この状態であるなら一番気になる事を、まずは尋ねた。

「いや、汐ノ香がいるなら、翼橿もいるの？」

天使と吸血鬼という対極でありながらも、息の合った憧れの二人。人間界に来ることもあったらしいので、有り得るのは有り得る。

「翼橿は相変わらず、引きこもってるよ？ それより水燬はいい加減、実家に少しでも帰らないの？ みんな心配してるのに」

「いやー、まだ全然、記憶とか曖昧だし……猫羽の血も貰わなきゃだし、当分いいかなー」

やっぱり悪夢だ、と彼は脳内で苦く笑った。当たり前のように消えた者が存在することが、何処まで「普通」か、その都度驚くのだろう。

そもそもこの汐ノ香は、彼をどういう存在だと見ているのだろう。猫羽の血？ と彼に訊き返さないで、彼が猫羽の働きで意識を取り戻したのは知っていることになる。

けれどその時、汐ノ香は敵として存在していた。その後どうなればこうして普通に、彼と同じクラスに通う学生になるというのか。夢というこの世界。その世界の前提、周囲の現状がわからないことに気が付く。

逃げるように教室を出た。親友にもっと話を聴いておけば良かった、と後悔した。

「周りが全部、この調子なわけかあ……オレだけが何も、設定を知らない。滅茶苦茶これ、居心地悪いな……」

彼自身も、夢を見る前の彼とは少し違う。ただキラでいた今までの彼に、水燬という、この魔物の記憶が戻ってしまった。キラでもある以上は、キラとして彼が目覚めた世界が根底であるはずなのだ。たとえ夢であっても。

「でもそもそも、オレが猫羽の家事手伝いになったの、冬前からだっけな……ここはまだ九月だし、オレが目覚めたばかりの時？」

元の記憶では、一年C組のはずの、猫羽の教室に行ってみた。誰もいないので、今度は猫羽のバイト先か、下宿に行くかを悩む。

「オレは目覚めてすぐ水燬の記憶が戻って、猫羽もそこで転校でないと、この状況の説明はつかない。何でか更に、汐ノ香まで在校で」

一年だけ留学の猫羽が、現実世界でそんなややこしい状況になるわけがない。その辺りは夢だから無謀なのだろう。

「もう六時前か……いつも通り夕飯の材料買って、ご飯作って待つ方が良さそうだ」

正確には、この学園の生徒である彼だと、果たして猫羽の家事手伝いをしているのかも怪しい。しかし合鍵はキーホルダーについていたので、猫羽の下宿に行くことにした。

そうして下宿を訪ねた彼を、普通に猫羽が出迎えていた。普段なら探偵バイトに行っている時間なのに、バイト？ この間やめたよ？ と、首を傾げられてしまった。

「いつもありがとう、キラ。ご飯、美味しい」

学生服の時には猫羽は、蜜柑色のリボンで紫苑色の髪を二つに括る。今日はもう、髪を下ろしてTシャツと短パンの部屋着だ。この状態は、彼が家事手伝いに行っていた猫羽と大差がない。下宿に猫羽が慕う相手——彼も親同士からすまゆうやの付き合いがある烏丸悠夜がいるのを含めて、彼が目覚めた世界通りだった。

「水燬君はいつまで、猫羽さんの家事手伝いに通うんですか？ まだ体調も全然整ってはいないでしょうし、大丈夫なんですか？」

剣呑な悠夜に、まーまー、と、湯呑にお茶を注ぐ。悠夜は彼が、猫羽の血を過あやまって大量に奪わないかを危惧しているのだ。確かに体調が悪くなればその危険性はある。

「そんなこと言っても悠夜さん、本当に心配なのは猫羽でしょー。オレは騙せませんよ」

まー食べて食べて、といつもの調子を装う。水燬の記憶が戻った話は言い難かった。既に当然の事であるのか、それとも以前と同じ、彼はキラだけのことになっているのか。

学校が違って、猫羽の下宿もキッチンも、何も変哲はなかった。猫羽が水燬を見つける大きな助けになった、悠夜と一緒に高校生になっている状態も。

「ところで悠夜さん……何か最近、変なこととかありませんか？」

烏丸悠夜は、果てしなく靈感の強い家系の神童だ。現状に何か違和感はないのだろうか。

猫羽がお風呂に入っている間、まだ下宿の居間にいる悠夜に、水燬も帰るタイミングを失ったので話を振ってみた。悠夜は正座で、黒髪に学生服といかにも深窓の令息。湯呑を両手で持った状態で、つれなく答える。

「変でないことの方がいいです。ヒトの許嫁の下宿に毎夜、異性の出入りがあるとかも」

ぶふっ。飲んでもいないお茶を吐きそうになった。悠夜が目を合わせずに続ける。

「いくら火剉君の頼みでも、ちょっと貴方達、距離が近過ぎるんじゃないですか？」

ちょっと待て。脳内で彼はつつこむ。火剉が彼に猫羽を頼んだ、それは有り得る。

しかし悠夜が許嫁。それはあんまりの話だ。

猫羽は確かに、悠夜を慕っている。しかし本人に、その自覚がないのだ。それなのに、この猫羽の夢では悠夜が許嫁とは。どんなに難しい経路を踏めばそうなるのだろう。

悠夜だって素直でないので、人間界に来たのは「別に猫羽のためじゃない」はず。「えっと……許嫁って、もう決定でしたっけ。オレ何もきいてなくて、えへへへー」

悠夜が眉間にしわを寄せた。彼の発言の、意図をきっと読み違えている。「水燬君が認めないと言うなら、協定は決裂です。猫羽さんの償いのため、血だけは水燬君に権利がある。他は全て僕にくれる、そう火剱君と約束したのを忘れましたか」

火剱君はそうでないと、猫羽さんを誰にも渡しませんからね、と。不服気ながら、猫羽への想いを隠さない悠夜に、彼はカルチャーショックを受けた。

「そうか、オマエ、火剱……そうなのか……」

「？」

あの兄が変わると、猫羽の周囲まで素直になるのか。彼が火剱の最優先事項であるのは屋上で解ったので、彼を助けるために悠夜を利用し、褒賞として猫羽を与えたと見える。

ちょっと待て。それ鬼過ぎないか、ヒオン。「夢だから、本当はいないから、好き勝手にしてるな……あの超感覚でそれをやるなよ、未恐ろしい奴……」

悠夜がトイレに行っている間に、一人呟く。彼は超感覚と呼んでいたが、親友もその妹も、他者の感覚が我が事のように感じる、特殊な直観の持ち主なのだ。悪用すればヒトの心や弱味に付け込むくらい、十分できてしまう。

さてさて、どうしたものか。猫羽とこの夢について話すなら、おそらくサシの方が良い。しかし悠夜が今夜のようにガードに入るなら、まず猫羽に付け入る隙がない。

一度出直そう、と猫羽の下宿を後にした。彼が寝泊まりするのは橘診療所という、彼の故郷の異世界と人間界をつなぐ謎の医院だ。そこにいる院長もアナザーワールドワイドな異端者なので、助言を求めることにした。

彼を処置室に泊めてくれる院長が、浴衣に黒いガウンの寝間着で唸った。

「なるほど、夢か。俺にはどれが夢でどれが現実か、それもさっぱり判らんからな」

ですよね……と数多の世界の記憶を持つ男に、長く世話になる彼も頷くしかない。「とりあえず俺は、火剱に会った事がない。だからオマエさんの話は本当だろう。火剱が大波を起こせる最初の生け贄なら、世界に後で割り込んだこの診療所には来れない」

そのためこの診療所なら、最も親友の影響が少なく猫羽と話せる。明日呼び出してやる、と院長が協力してくれた。原初の大波の夢とやらは、院長も興味があるらしい。

その夜は全然眠れなかった。まず処置室の寝台自体、狭くて寝心地が悪い。キラの自分は随分良い子に、現状に適応していたものだ。

「お袋達……元気にしてっかなあ……」

ここの自分は、おそらく目覚めて一度も、故郷に帰っていない。すぐ猫羽の家事手伝いになっていないと、九月にここにはいない。

それも火剱の尽力があるのかもしれない。故郷のいここ達と違って、彼も火剱も、血の匂いが絶えない暮らしをしてきた。今更普通の平穏を望むなんて、本当は叶わないこと。

それでも今日のように、火割が笑うなら、彼はこちらで楽しんで暮らしただろう。この夢に違和感を持たないでいられたのなら。

翌日の夕方、下宿に帰る前に猫羽が一人で橘診療所に来た。悠夜には言わずに来た、ということだった。

「昨日から、ちょっと様子を変だね。キラ」

さすがの直観で、猫羽は不思議そうだった。夢なんて話をすると、あまりに突飛だと普通は引かれてしまいそうだが、彼がキラとして生きること自体が夢の痕でもある。

なので包み隠さず、火割からきいたことを猫羽に話した。猫羽はしんみりしながら最後まで聴き、自分が夢を見ている自覚は無いが、彼の言うことも嘘ではないと信じてくれた。現状がもしも夢であるなら、どうしよう、と。

「キラは、この夢、覚めた方がいいの？」

「ってというか、猫羽は起きた方がいい。夢の外では多分、昏睡で寝込んでるはずだし」

そこまで言うと、ふっと、彼の背を寒気が掴んだ。太い点滴に繋がれる猫羽が浮かぶ。「これが夢なら……夢だとするなら、猫羽は、寝込むことになる……？」

？ と猫羽が首を傾げる。しかし彼には、とても受け入れ難い仮説が浮かんだ。

もしもここが、夢ではないなら。彼だけが違和感を持っているにせよ、それは彼の問題として、他の誰もが楽しく過ごしていける。

猫羽も猫羽として生きていける。違う現実があるとする方が、事態は重いのだ。

夢でなく、現実だとしてしまう方がいい。本能的に突然、その悪寒が襲ってきた。彼が黙ってしまったので、猫羽が心配げに言った。

「そうだね。寝込んでるわたしがもしもいるなら、みんなに心配かけちゃダメだよな？」

落ち着いた声が、彼を引き戻した。それは確かにその通りで、もし本当にここが夢なら、寝込む猫羽を無かったことにはできないのだ。

「……汐ノ香が怪しい。どう考えても、翼権がいなくて、汐ノ香だけいるのは変だ」

何故か彼の、意識が遠くなってきていた。

「夢から覚める方法はわからない。でも……」

そこで「彼」の、記憶は途切れた。

それはここが、さざなみの夢となった瞬間だった。



綺想曲 ★序曲

今この世界は、わたしが見ている夢。

さざなみ学園に通うわたしに、誰かがそう言って消えました。いつ、誰が言ってくれたのか、それもわからなくなっちゃって。
——っていうか、猫羽は起きた方がいい。

昨日の夜は確か、学園の帰りに、どこかの病院で水月^{みづき}に会ったっけ……。あれ、水月って、誰だったかな？ わたしは悪魔使いだから、最近契約した悪魔さんかも。何で契約したのかは、よく覚えてないんだけど。
「おはよう……。あれ、誰も、いない……。？」

いつも通りに、寝起きの悪い朝。家賃の高い1LDKのお部屋で目が覚めます。

起きているのに、まだ眠くって。うとうとしてしていると、夢だって言うヒトの夢が、またわたしに話しかけてきます。
——覚める方法はわからない。でも……。

うん、わたしも朝が強くなる方法、本当にわかりません。もうすぐ登校の時間なのに、お布団が気持ちよすぎて出たくありません。
——でも、多分一番の障害は、猫羽自身だ。

これはずっと、夢の誰か？ 夢ならこれも、覚めなきゃいけない？ どの夢から起きたらわたしはいいんだろう。

とりあえず今は、体が冷えてるから、シャワーをするために何とか目を開けました。

毎晩、真っ黒なところで沢山の夢を見て、朝には全身が冷え冷えなわたしです。日本にいつでもお湯が出るシャワーが無かったら、絶対に起きる気力がなかったと思う。

故郷の異世界でもお風呂はよく、幼馴染みの悠夜がいる御所で入らせてもらえました。悠夜は術師の家系のヒトで、二つ年上。最近縁談が多発して困ってるから、わたしが悠夜の許嫁ということにして、悠夜もしばらく、人間界に避難してます。何か変な感じだけど、これくらいで役に立てるならお安い御用です。

それにギソウ許嫁だと、悠夜がわたしと、笑顔で話してくれて。学園でも悠夜は人気があるから、わたしと仲良い方がいいんだって。その方が悠夜の女除けになるって……。あれ、これは、誰のアドバイスだったっけ？

「どうせ一限目はもう、遅刻だし……。今日もおにぎり、沢山作っていこうかな……。」

家賃にほとんど生活費を取られるわたしは、お米に雑魚とか鰹節が主食です。卵の料理も練習中だけど、やっぱりおにぎりが無難。

「冷蔵庫に知らない野菜が入ってる……これ、どうやってお料理したらいいのかな？」

何だか変な事ばかり。まるで誰かが、わたしの家でご飯を作ってくれてみたい。

朝ご飯は食わずに果物のジュースを飲んで、おにぎりを持ってわたしは下宿を出ました。今日もお外は、いいお天気そうです。

さざなみ学園は、小学部と中学部と高校部、三つの学校が合わさった大きなところです。小学部からそのまま、高校部まで上がる人もいれば、半分ほどは受験や推薦で入れ替わるものみたい。他にも何か理由があれば、時期外れの転校生もちょくちょくあります。「……あれ？ 知らないヒトがいる……」

一年A組が、わたしのクラスです。教室の一番後ろがわたしの席で、いつもは隣の席は誰もいないのに、今日はわたしと反対の髪型、右ポニーテールの女の子が座ってます。

三限目が始まる前に教室に入ったわたしに、休み時間中だったから、女の子は嬉しそうに笑って遅刻のわたしを出迎えました。

「こんにちは、紫音^{シオン}ちゃんです！ オレ、今日から転校してきたの、仲良くしてね！」

わたしは昔から、長い黒の髪を左で括ってます。珍しい青銀色の髪を右側でポニーテールにする転校生のヒトは、女の子でもオレって、不思議。でもとても可愛いね。

「フルネームは冬花^{トウカ}紫音。趣味は讃美歌！ 猫羽^{トウカ}ちゃんは、青い目が凄くキレイだね？」

わたしの目は髪と同じ黒だけど、青っぽいとは言われます。もっと喋りたいのに、短い休み時間が終わりました。わたしは咄嗟に、ありがと、よろしくね、しか言えなくて。

その後はお昼まで眠っちゃって、気付けば紫音はいませんでした。お昼休みです。

お昼ご飯はいつも、悠夜と屋上で食べます。わたしがおにぎり、悠夜がお惣菜をいくつか持ってきて、分けっこするのが日常です。

「え？ 三年生にも、転校生さんがいるの？」

「D組に來たみたいです。A組とは廊下の反対にあるので、全然会いませんでしたけど」

三年A組の悠夜。悠夜もわたしも、あまり慣れない人間界では友達がいません。

さざなみ学園のクラス分けは出身別だと、土曜の全体朝礼で園長先生が言っていました。A組は留学・帰国子女枠、B組は学園関係者、C組は地元推薦枠、D組は全国枠なんだって。

「美少女プライムだと専らの噂です。チルダは数人いても、プライムは初ですから」

チルダ生とプライム生。園長先生が、プライムは天才、チルダはプライム間近の優良枠って言ってたかな。他にアポスト生もいるって話があったけど、何枠だったっけ？

A組の留学生なわたしや悠夜は、生徒の間でダッシュ生と呼ばれてるみたい。いつまでいるか決まってるからで、わたしも悠夜も、日本で一年高校に通えば帰る予定です。

「チルダのヒトもプライムのヒトも、大体はD組だよ。C組にあと少しいるくらい？」

「そうですね。A組は留学者か、帰国子女の方は学力の偏りがあることが多いですから」

すまして言う悠夜です。でも本当は悠夜、プライムを断ったのをわたしは知ってます。せめてチルダで、と言われても、あんまり目立ちたくない悠夜は辞退したみたい。A組初の称号生が出るころだったのに、って、一年なわたし達の担任の先生が言ってました。そんな感じで、本当はこっそり称号生だったヒトって、沢山いるのかもしれないね？

「あ。噂をすれば、D組派閥ですね。……！」

屋上に他にもヒトが入ってきました。普段は人見知りな悠夜が、最初はリラックス状態だったのに、最後のヒトを見て強張りしました。

来たのは三年D組の^{ラクト}烙斗と水月。わたしと悠夜には故郷での知り合いで、日本の生活が長い烙斗と水月は、すっかり日本人として、全国卒のD組に入ってるみたいです。

でもその後ろに、悠夜が緊張する知らないヒトが続きました。銀色の髪で蒼い目の烙斗の背中に隠れてるけど、キレイな灰色の髪を二つにくるくる巻く蒼い目の女の子。

向こうも何だか、わたしや悠夜を怖がってるみたい。

「二人共、こっちだよ。おにぎりまだあるよ」

「ハハハ。いつもサンキュ、猫羽」

何でお弁当を持ってこなくて、学食にも行かない烙斗と水月は、わたしのおにぎりをよく持って帰ります。

烙斗におにぎりを渡すわたしに、烙斗と同じで銀色の髪の水月が、鮮やかな赤い目で一部だけ長い括り髪を肩の後ろに振ってから、わたしの方に屈みました。

「猫羽、おはよ。元気してた？」

「……今はお昼だよ、水月」

「あ、そっか。でも、おはよって気がしてさ」

空気の軽い烙斗の横で、いつものったりとしてる水月。

何だか水月、柔らかい赤の目が潤んでる気がする。どうしたんだろ？

「ところで烙斗さん……後ろの方は？」

悠夜が恐る恐るききました。知らないヒトとお互いで怖がってるから、悠夜から聞いたのは偉いよね？ 人見知りって大変だね。

「ああ、紹介したくて連れてきたんだ。これ、オレの双子。風漓って言って、前からずっと転校したがつって、やっと許可が出てさ？」

悠夜の空気がちょっと和らぎました。悠夜、烙斗のこと、凄い信頼してるもんね。

後ろの女の子も、ほら、っと前に出されて、もじもじしながら自己紹介をします。

「初めまして……^{よひらかざり}夜葩風漓、です……」

「よろしく……って、まさか貴女が噂の初のプライム、可憐な^{よひら}四片の転校生ですか？」

烙斗とは名字の違う女の子。何だか風流な二つ名に、オドオドとはにかむ転校生さん。

「そっ。悠夜も猫羽も、仲良くしてやってよ。ほんとに高校の勉強なんて風漓にはいらないくらいなんだけど、歳の近い友達がほしくて、そのために学校に行きたがつたから」

烙斗の腕にしがみつきながら、女の子——風漓おねえちゃんが顔を赤くしました。多分、どうしてなのか、わたしを見つめながら。

三年D組のみんながお休みの終わる間近に来たから、それからあんまりお話はできずに、わたしは一年A組に戻りました。

「あ、猫羽ちゃん、帰って来た！」

こっちにも転校生のヒト。最初からずっとにこにこしてるけど、更に嬉しそうに笑ってわたしを待ってたみたいでした。

「改めて、よろしくね！ オレ、氷輪水月の使い魔で、猫羽ちゃんの話をよくきいてたの」

あ、そうなんだ。だからわたしにどんどん話しかけてくれるんだね、紫音は。

「うん。紫音はお昼休み、どこいったの？」

わたしも話したかったけど、起きたらいなかったから。てへ、と紫音は笑います。

「一年D組！ 猫羽ちゃんに会いたがってるチルダがいるから、呼びに行ったら、猫羽ちゃんとすれ違っちゃったみたい」

「そうだったんだ。D組にも紫音は知ってるヒトがいるんだね。それも、チルダのヒトが」

だから放課後に会おうよ、と紫音が無害な笑顔で誘ってきました。わたしもこの時には、何の疑問も持たずに頷きました。

わたしには全然、友達がいません。留学が一年間だけだから、故郷の知り合いのヒトと話せばいいや、って。こっちで友達を作ってしまうと、別れる時が淋しくなるから。

紫音も水月——故郷の縁なら、紫音の知り合いとも仲良くしていい。そんなつもりでした。

午後の授業も全部眠って、あっという間に放課後が来ました。わたしと同じように授業中は爆睡してた紫音が、わたしを引っ張って一年D組の教室に向かいました。

そこで引き会わされたチルダのヒト。初見でわかる悪魔の気配を持ったヒトが、本業は悪魔使いのわたしに笑いかけました。

「会えて嬉しいです、^{うつぎ}猫羽さん。ボクは、^{たつき}竜牙ミサキ。一緒にこの世界を変えませんか」

黒いチョーカーに長い黒髪^{あか}のツインテール。可愛いのにボク口調で、きらりとした紅い眼で不思議なお話を言うから、わたしは思わず、なんのこと？ と驚きます。

でも本当は、何となく話が解ってました。

「時は来ました。夢は必ず、いつかは覚めるものです。猫羽さんにはわかってるはずです」

悪魔の気配を持ったミサキ。どこかで誰か、消えたヒトが言ったことと同じお話。

わたしは何もわからないけど。意味はわかったから、わたしの答を言います。

「.....夢って、絶対、覚まさないやダメ？」

ミサキがそこで、一転して不敵に笑いました。

「だってネコハは——探偵でしょ？」

それが闘いの合図です。わたしは決めます。

「じゃあ.....捜査さえすれば、いいんだよね」

もしもこれが、夢であるなら。覚めなきゃいけない理由を探す、そう言います。

こうして、さざなみの夢が燃え上がります。



<https://xfolio.jp/portfolio/sky/works/5263803>

★①★ 十月

九月の終わりに、二人の転校生さんが来て、すぐに十月が始まりました。平和って、長く続かないな、って何となくユウウツでした。

一年A組の教室で隣に座る転校生の紫音が、悪魔の使い魔らしくわたしに絡んできます。

「猫羽ちゃん、授業なんてさぼろうようー。出席日数とか関係ないじゃん、留学生だし」

紫音は三年D組にいる悪魔、水月の使い魔。水月はわたしの故郷な異世界での知り合いで、同じく異世界人の烙印といつもつるんです。

あれ、でも、水月と烙印は、故郷でわたしとどういう知り合いだったっけな……？

「授業をさぼってどうするの？ 紫音」

「遊びに行こうよ！ 行きたい所がないなら仕方ないから、ミサキの捜査でもしようよ」

一年D組にいて、成績や能力が優秀らしいチルダなミサキ。悪魔の気配をさせてるけど、悪魔そのものじゃない不思議なヒトです。

わたしはミサキと知り合ったばかり。この今の世界は夢だとミサキが言うから、夢でも何か悪いの？ とわたしは言い返しました。

だからもしも、この世界にあんまり良くないところを見つけたら、ミサキの話をきく約束になったの。それが通称ミサキの捜査です。

いったい誰の味方なのか、水月にもミサキにも反抗する紫音はやたらに楽しそうです。

「捜査は探偵の醍醐味だね！ 事件がないなら作ればいいよ！ この夢が面白くなればなるほど、誰にも否定できなくなるから」

「ええ……そういう考え方もあるんだ……」

「猫羽ちゃんだって、ミサキに言ってくれたじゃん。夢の何が悪いの、って。オレも水月に、何度も同じことを言ってきたんだよね」

紫音は、水月の言うことを一応きくけど、紫音の目論見があるみたい。ミサキとも仲は悪くないし、むしろわたしとミサキを紫音が会わせたのに、仲間ではないみたい。

そうは言っても、紫音もわたしの味方には思えないの。どうしてなんだろう。

「紫音は……ここが夢でも、別にいいの？」

席が隣だし、わたしに同じ学年で他に友達はいないから、紫音といる時間があっさりと多くなりました。休み時間はいつもこうして、紫音と話すようになったわたしです。

「前のオレなら、駄目だったかな。でも今のオレは、探してるんだ。世界が、猫羽ちゃんがこの道を選んだことに、きっと理由はあるはずだったんだって」

変わったのは水月もだよ、と。多分、夢の否定派な水月に反して動く使い魔の紫音を、自由にさせる悪魔に紫音が笑顔を消しました。

「水月こそ諦めてたのに、猫羽ちゃんをここに来て起こしたんだ。烙斗のどっちつかずは今まで以上だし、風漓は何て言うか別人だし」

何となく、一人だけ一年生な紫音の不安がわたしにもわかりました。三年D組の烙斗、水月、風漓おねえちゃんと紫音は本来、同じ立場のはずなのに。それが紫音だけ一年A組で、紫音の知るみんなと少し違うみたい。

「だからオレは、猫羽ちゃんと一緒にここを調べたいの。ほんとに猫羽ちゃんと同じだよ。良さそうなら夢にいいし、良くないなら起きよう、そんな感じ」

大人びた笑顔に、わたしはちょっと、心の警戒心が抜け切りません。紫音はまだ、一番大事なことを隠してる、そんな気がしたから。

でもそれをきくとすぐ、夢が終わりそうな気がして、わたしは目を^{つむ}瞑ることにします。

きっと今が、色んなヒトの都合がぎりぎり折り合う妥協点なんだ。紫音が隣で女の子の学生服で差し出した手を、わたしは掴みます。

「何から調べる？ 猫羽ちゃん」

にこっと、わたしの意志を尊重してくれる、その顔は嘘の無い紫音でした。

でも調べるといっても、わたしには心当たりがなくて.....。

勢いでお昼前の四限を抜け出しちゃって、校舎裏に隠れるわたし達でした。この世界、この学園が夢って話みたいだし、まずは怪しいヒトがいらないか探すしかない？

「日本にしては、変な気配だらけだけど.....」

早速、怪し過ぎて困りました。今までよくわたし、違和感なしに過ごしてたなあ.....。

わたしには直観、ヒトの気配でそのヒトの状態や考えることが何となくわかる、不思議な感覚が昔からあります。これがあるから、悪魔使いもしていました。

普通は悪魔と人間の契約は、魂を代償に悪魔が人間の願いをきくものだけど、わたしの場合には悪魔の願いを叶えるために、悪魔の力を借り受ける契約が主です。悪魔の願いや解決策を感じられる、この直観があるからできる契約法です。

探偵バイトにもよく使っていました。でも、日本の探偵の実際は、素行調査とかばかりで全然面白くなかったんだけど。

「んじゃ、一番近い気配から見に行こうよ！」

楽しげな紫音。わたしもひとまず頷きます。

そうして一階にある保健室に、まず行こうとしたわたし達だったんだけど。

「君達、ひょっとしてサボリかな？ ダメだなあ、もう少し位、気配を隠して動かないと」

何回か聞いたことのある優しそうな声が、わたし達を引き止めました。

振り返った先に、三年D組の担任の先生が笑っていました。

「あ.....^{はくが}白^く先生」

烙斗や水月がよく話してるから、わたしも知ってた人間でない先生。黒くて短い髪に、薄い青の目と白い襟のシャツが高貴そうだけど、まだ学生みたいな若さの先生でもあります。

「^{あしず}葦津先生達にばれたら停学になりかねないよ。授業時間中のおいたはお勧めしないな」

葦津先生達は、園長兼理事長と、校長先生のことです。夫婦とも姉弟とも噂されるけど、どんな関係なのかは先生達も知りません。

とりあえず、人間でない白^く先生も怪しい筆頭です。強い風の力を持ってて、どうしても日本の学園で先生をしてるかがさっぱりです。

「じゃあ授業時間中でなければ、この学園のことを調べていいの？　ハクガせんせー」

紫音は、怖いものなしみたい。白^く先生もうん、とあっさり頷きます。

「あと、今は僕も、授業がない時間で暇だね。君達が下手にちょろちょろしないように、僕に教えられることなら教えてあげるよ？」

それってどんな打算なんだろう……白^く先生。

白^く先生の気配は、何処か掴み所がなく、葦津先生達のことは良く思っていないみたい。でも気配を消して近付いてきたし、わたしの味方な感じもしない。

「じゃあさ、白^く先生。単刀直入にきくけど、この世界——学園って、夢？」

紫音の方が、わたしより探偵をしています。白^く先生はあはは、と笑うと、参考書を持つ手も含めて諸手を上げて、校舎裏にいるまま困ったように話をしてくれました。

「夢の定義によるかな。夜寝る時の夢では、勿論ないだろうし。夢幻のことか、それとも、ヒトの願いのことか。君達はどう思う？」

それは少し、切なげな白^く先生の声でした。

幻か願いか。どっちであれ、夢ならいつか消えちゃうね、と言いたげな白^く先生です。

「わたしは……ここは、願いの気がするな」

「そうなんだ？　それは、どうして？」

「だって、白^く先生、夢が覚めてほしくない感じがする。それなら、わたし達に力を貸すのは、間違いなんじゃないかな？」

直観だけで喋るわたしに、白^く先生は青い目を丸くします。まるでわたしもこの夢から覚めたくないこと、そっち側だとわかってるかのように。

「楡さんは、この学園の事がわかれば、夢を終わらせる側になるって。そう確信してる、そういうことかな？」

「……………」

それはきっと、その通りです。わたしは、だからあんまり、捜査に乗り気じゃなくて。

「それならいいことを教えてあげる。この夢はね、楡さん。もしも楡さんの言う通りに、幻でなく願いであるなら、夢を現実にする道だって存在しているんだよ」

だからわたしに接触するんだよ、と言わんばかりの白^く先生。わたしはそれをきいて、両目からウロコが飛び落ちました。

「夢は、終わらせるだけのものじゃなくて。叶えるものだって、夢でしょ？」

いたずらっぽい、薄い青の目。心なしか、その青が強まって、わたしを見たようでした。「僕は、楡さんの力になるよう介入された、悪魔に近い使者と言えいいかな。学園側の存在ではあるけど、僕の願いをもし楡さんが理解してくれるなら、こっそり協力するよ？」

「何それ、あやしー！ 猫羽ちゃん、簡単に信じちゃダメだよ、コイツ！」

紫音の言う通りではあります。白☒先生は多分、自分の願いのためなら、わたしに不利な展開になっても自分を優先すると思う。

でも、願い自体は優しい気がして。わたし、いつの間にか先生に親近感を持ってました。

「白☒先生の願い。それ、きいてもいい？」

ふっと、先生が本当に、儚い顔をしました。まるでずっと、この時を待ってたみたいに。校舎裏の建物の陰に、わたし達は座って、白☒先生は服が汚れないようにしゃがんで、秘密の相談が始まりました。

「僕がこの学園に就職したのは、一年D組の、刈奈先生にもう一度会うためなんだ。君達の力を借りようとする竜牙ミサキは、刈奈先生が後ろ盾だね。刈奈先生自身は無自覚だけど、本来この学園にいるヒトではないんだよ」

刈奈先生。長い黒髪が綺麗で、黒縁眼鏡の青い目の先生。

話したことはなかったけど、わたしも不思議と目を惹かれた女の先生です。

「刈奈先生は僕を覚えてないよ。でも僕は、刈奈先生にお近づきになりたいくて。できればこの夢の中では、両想いになって終わりたい」

清々しいくらいにまっすぐに、白☒先生は願いを教えてくださいました。わたしと似てて、ヒトの嘘を見破り易い紫音が赤面しちゃって、白☒先生は本気なんだ、ってわかります。「一年と三年だと、同じ教員でも全然接点がなくて。楡さんが烙斗君や水月君と一緒に、一年D組で問題を起こしてくれたら、僕は烙斗君達の担任として関わりやすいな」

「それ、オレ達に問題児やれって言ってる？」

「事件がなければ、起こせばいい、でしょ？ 冬花紫音君」

ぐっ。何処でわたしと紫音のお話を聴いていたのか、隙のない白☒先生に、紫音が更に警戒の目を向けます。

「それで烙斗達は白☒先生にかばわれたって、オレと猫羽ちゃんの担任は無関係だから、誰もオレ達をかばってくれないじゃん？」

「そうなんだよね。そこが未知数で困るよね」

刈奈先生はそこまで酷い裁定をしないとは思うけどね、と、わたし達のことはすっぱり切りそうな、無責任な白☒先生です。

「竜牙ミサキはチルダだから、余程のことがないと、巻き込めば楡さん達が悪者にされるのは間違いないよ。でもどの道、彼のことは調べないといけないんじゃない？ 君達」

白☒先生の言う通りでした。紫音も実際、ミサキとは顔見知りなだけって言うし。
一年D組。まずはそこから捜査開始です。

＊

今まで関わりのなかった一年D組のミサキが、どうして急にわたしに声をかけたのか。
その前に調べに寄った怪しい気配の場所、保健室では黒い髪に黒い眼で白衣の男の先生が、無愛想にわたしと紫音を出迎えました。

「俺が誰なのかわからないのか、お前さん達.....相当きてるな、ここはあちこち」

「意味わかんない！ 学校で、しかも保健室で煙草吸う先生、信じられないし！」

紫音がわーわーと、保健の先生に絡みます。わたし達は授業をさぼった手前、体調が悪い、と一応保健室に寄って、ついでにアリバイを作ろうと試みたわけなんだけど。

「凄く強い、悪魔さん.....何で、ここに？」

「悪魔っていうな。それと俺は、いう程強くないから当てにするな」

とりあえずその保健の先生は、葦津先生達のことは嫌いだから、手伝えることがあれば言え、とわたしと紫音に言いました。

何だか今日は、仲間探しをしてるみたいない日です。といってもわたしは、葦津先生、特に校長先生が大好きなんだけど.....。

「この学園内では、身の振り方に気を付けろ。夢や希望を壊す苦労人は無かったことに——生け贄にされる。くれぐれもハッピーでいることだな、お前さん達も」

何の話なんだろう.....何だか、怖いね？

お昼休みになって、いつも通りご飯にきた悠夜に、ちょっとだけミサキについて相談をしてみました。

何となく悠夜は、ここが夢と言うと動揺しそうな気がしたから、一年D組のチルダは知ってる？ とだけ。

「わたしに声をかけてくれたんだけど、目的がわからなくて。放課後に会いに行きたくて、烙斗達に、ついてきてもらっていいと思う？」

「烙斗さん達に？ どうしてまた？」

そこで紫音が、どどんと声を上げます。

「そりゃ、プライム風瀉がいるからだし！」

ちなみに悠夜は、紫音とは初対面。水月の使い魔とは教えたからまだマシな方だけど、人見知り属性がちょっと発動してます。

「ほんとに隠れプライムの悠夜君にもついて来てほしいけどさ。あんまり大人数で会いにいても、チルダも警戒しちゃうでしょ？」

「隠れプライムって.....何で、あなたは.....」

悪魔な水月の使い魔、紫音。悠夜が元々、仲が良いのは烙斗で、水月は顔見知り程度。呪術とか禁忌の業も扱う悠夜のお家だから、悪魔な水月も見逃してもらえてるけど、本当は悪魔ってあんまり心証が良くないよね。

「夜葩さんは、プライム転校生といっても、僕以上に大人しいのに。巻き込むのはどうかと思いますけど……」

まだ転校して少しなのに、もう悠夜は風漓おねえちゃんと打ち解けたみたい。いいな。

話していると、D組の三人が屋上に来ました。マジメに相談中のわたしと悠夜に、何々？と烙斗が、興味津々で入ってきます。

「ミサキと話したいの？ あいつ、賢そうに見えてお茶目だから、そんなに警戒しなくていいけどな？」

「そちらも知り合いなんですか、烙斗さんは……顔、広過ぎませんか、いつもながら」

わたしもびっくりでした。水月はほとんど知らないらしくて、風漓おねえちゃんは胸の前で手を握りしめながら、黙ってます。本当大人しいなあ、風漓おねえちゃん。

「猫羽に近付く目的があれば、言葉通りの奴だと思うけどな。そんなに深く考えなくても」

一緒にこの世界を変えよう。初対面の時に、ミサキはそう言ったよね。夢はいつか覚めるものだって。紫音がそれをやんわり言います。

「この学園を変えたいんだ、って猫羽ちゃんに言ってきたよ。猫羽ちゃんはプライムでもチルダでもないのに、何でだと思う？」

「えー。学園改革って、プライムやチルダは関係くないかな？」

水月がぼんぼん、と紫音を撫で叩きます。それを言うなら、一年のミサキが改革とか言う自体おかしいでしょ！ と紫音も反論します。

「まあ確かに、何で猫羽に目を付けたのかは、オレも気になるころはあるな」

そこで烙斗が、ふっと、風漓おねえちゃんを見ました。

あっという間に、放課後です。昼休みには屋上で、どういう風にミサキに会いにいか、ある意味烙斗の無茶ぶりが風漓おねえちゃんに向けられました。

烙斗の案なら確かに、猫羽ちゃんは被害者で済みそう、と紫音は納得したんだけど……わたしは風漓おねえちゃんがどうして、その無茶な話を承諾したのかが気になります。

烙斗の陰に隠れる風漓おねえちゃん。でもわたしを見つめる蒼い目は優しく。それで、まさかこんな変な役割を、引き受けてくれるなんて……。

放課後の一年D組に向かって、これから風漓おねえちゃんが討ち入ります。

「こ、このっ、泥棒ネコっ……！」

事件がないなら自分で作ろう。そんな話をした紫音を知らないはずなのに、烙斗は屋上で、ミサキの素が見たいなら一芝居打とう、と笑って提案をしました。

「ね、猫羽は、私のなんだから……！ あ、あなたには、あげないんだから……！」

ぽかーん。烙斗が連絡して、教室で烙斗を待ってたみたいミサキが、小さな声でも必死に喧嘩を売る風漓おねえちゃんに、紅い眼を大きく丸くします。

「ね、猫羽に、何の目的で近付くの……！？」

これ、おねえちゃん、どういう設定だろう。わたし自身も正直、よくわかりません。

プライムとチルダ。そんな称号を持つ二人が、一年D組の教室の後ろで向き合います。

「え、えっと……貴女は、いったい？」

ミサキが首に巻く棘の輪付きチョーカーを、さするように触ります。大事そうな黒い首輪。何かの不思議な力の発動を感じます。

わたしはどうか、その力を知ってる気がして、ズキン、と激しい頭痛がしました。

ミサキが紅い眼を無色に変えます。納得したように風漓おねえちゃんを見ました。

「——格斗様！　そういうことでしたか！　でもこれ、ボクにどうしろっていうの？」

格斗……様？　ミサキと格斗、いったい、どういう関係性なんだろう？

ミサキはどうして、わたしに近付くのか。それをきいた風漓おねえちゃんに、ミサキは困ったような顔になりました。

「何でネコハになって……それは……——」

教室の外で、わたし達は気配を窺います。でも仕組まれたようなタイミングで、黒髪を結い上げる担任の先生が通りかかりました。

慌ててわたし達は壁から離れたんだけど、あなた達、何をしてるの？　と、黒縁眼鏡の刈奈先生が、不思議そうに扉を開きました。

「あら？　どうして三年のプライム生が？」

わー、先生！　と、ミサキが助けを求めるように飛びつきます。風漓おねえちゃんは、ここまでか、というように黙り込みました。

風漓おねえちゃんをかばうように、すぐに格斗がD組の教室に入ります。

「お待たせー、ミサキ。って、あれ、風漓？」

自分で仕組んだのに、とぼける格斗。でも風漓おねえちゃんはすぐ格斗の背中に回って、刈奈先生の不審げな視線から逃れます。

刈奈先生もそのままちょっときつい目色になって、格斗の方に視線を移しました。

「竜牙格斗君？　一年の教室に何か用が？」

あれ？　格斗は、ミサキと、名字が同じ？

そういえば風漓おねえちゃんは、夜葩で。格斗と双子だっていうのに、名字が違って。

「すみません、いとか約束をしてたもので。風漓はオレの付添いです、お気になさらず」

「気にするな、と言われても、明らかに竜牙さんが怯えてるじゃないですか。夜葩さんと、何かあったんですか、竜牙さん？」

う、と、ミサキが困ったように、刈奈先生と格斗を交互に見ます。格斗は呑気に、手を振ってミサキに口止めをしようとしています。

そこでさらに、こっちは確実に計画的に、通りがかりの白箱先生が一年D組の教室へと入っていきました。

「格斗君？　夜葩さんもうしたの、一年の教室で。刈奈先生、何かお困りですか？」

結局、ミサキがどうしてわたしに近付くかはわからなかったけど、他は大体目的通りになりました。全員生徒指導室に呼ばれました。

廊下にいたわたしと紫音。教室の中にいた烙斗と風漓おねえちゃん。そしてミサキ。

烙斗と風漓おねえちゃんは、学園では双子なのを隠してるみたいです。名字も違うし、だから刈奈先生にとっては「上級生二人が、謎に年下の生徒に詰め寄った」状況みたい。

まあ、双子ってわかってても、親戚喧嘩とか、そんな平和な解釈にはならなさそう……。 「あの、刈奈先生、ボクはもういいんです」

ミサキは必死に、烙斗をかばおうとします。それが逆に、不審に映っちゃってるんだけど……。そもそも刈奈先生は、烙斗に不信があるみたいです。

「今度は何をしたんですか？ 竜牙烙斗君。あなたが泣かせた相手は、両手でも済まない人数ですよ？」

ええ、何それ……。烙斗、ひどい……。

「あはははー。さすがにオレも、ミサキには手を出さないって。なあ、ミサキ？」

ぶんぶん、とミサキは首を縦に振るけど、みんなそうやって烙斗君をかばうんです、と刈奈先生は更に、疑いの目を向けてきます。

「椋さん達は、どうして教室の様子を窺っていたんですか？ 何が起こってたんですか」

当然の質問を刈奈先生がします。わたしと紫音は、顔を見合わせてから答えました。

「わかりません。入るなって言われました」

関係ないことをアピールするために、そう言えって、あらかじめ言われてたんだけど。刈奈先生はますます、厳しい顔になります。

「他生徒を締め出してまで、竜牙さんを……」

何だか凄い目になってるなあ、刈奈先生。烙斗、どうして、こんなに刈奈先生の不信を買ってるんだろう？

そこでやっと、白○先生が仲裁、もとい、刈奈先生へのモーションに入りました。

「うちの生徒がすみません、刈奈先生。もしご心配でしたら、停学でも退学でも何なりと処分を下しますので」

あれ、白○先生、烙斗を全然かばってないね？ ミサキの方がぎゃーって顔です。

「ぼ、ボクは本当に大丈夫ですから！ 夜葩先輩とは、烙斗様の取り合いをただけで！」

それは嘘だけど、ミサキの表情が満更でもないせいか、刈奈先生がぼかん、と目を丸くしました。これ、ミサキ、半分は本音？

様付けて、と刈奈先生はますます呆れた顔をしたけど、悪い男に引っかかっちゃダメ、とミサキをとりなして指導が終わりました。

指導室を出ると、ミサキは逃げるように帰っちゃって、話はできませんでした。

「まあ、あれはミサキ、何も口を割らないよ」

わたしは風漓おねえちゃんに、ありがとう、と言ってその日は終わりました。

わたしにも無口なおねえちゃんが、灰かに笑いました。



<https://puboo.jp/book/135309>

★②★ 十一月

時間って、早いです。一カ月がすぐ過ぎて、もう冬の寒気が来る頃になっちゃいました。

わたしと一緒に学園を調べ続ける紫音が、苦い顔で手袋をつけながら口にしました。「あっちこっちが、違和感だらけなのは確かなんだけどさあ。何と比べて何が変わなのか、それがわかんないとお手上げだよねぇ？」

まるで紫音の言う通りです。何か変、とはわたしも思ってるんだけどな。「紫音もわからないの？　そう言えば紫音は、どうしてここが夢だって感じてたの？」

今更だけど、そのおかしさが浮かびました。ミサキを除くと、わたしと紫音、それに白☒先生くらいだね、ここが夢と思ってるのは。白☒先生は学園側のヒトで、ここが変だとは知っていても、首謀者ではないみたいだし。

「オレ？　オレは水月に、猫羽ちゃんを迎えに来るように言われて転校してきたんだよ。なのに水月達、猫羽ちゃんに深入りはしないでしょ？　猫羽ちゃんをどこに連れていけばいいか、オレも思い出せなくて困ってるし」

そんな事情があったんだね、紫音。何だかずっと、ぬるま湯の中みたい、と紫音が言うから、わたしもそう思うって答えました。

何かが色々変だとしても、誰も困ってない。そんな実感が、多分一番近い感覚です。

一年D組に三年生侵入事件の後から、白☒先生と刈奈先生はよく喋ってる姿を見かけるようになりました。烙斗が悪者になった甲斐はあったみたいです。

よく慎重に気配を探ると、烙斗とミサキ、結構喋ってることがあります。何を話してるかまではさすがにわからないけど、凄く仲が良さそう。いいなあ、って思うのは、わたしだけでなく風滴おねえちゃんもでした。

「私は、猫羽が友達でいてくれたらいいけど……何かが足りない気がして、心もなくなくて」

その時紫音は、どこか辛そうな顔で、風滴おねえちゃんを見てました。最近は女子会で三人でいるのが増えて、わたしは楽しいけど。

プライム生の風滴おねえちゃんは、本とか密度の濃い情報を、何でも一目で覚えられる天才さんです。故郷の魔道にも凄く詳しくて、呪術の天才な悠夜がよく張り合ってます。

何だかみんな、楽しそうだな。何か大きな幸せの出来事があるわけじゃないけど、この日常の中には、薄暗いところがないみたい。

わたしも紫音や、風滴おねえちゃんと一緒にいられて嬉しいな。校長先生にも、楡さんと冬花さんと夜葩さんは仲良く並ぶ紫陽花^{あじさい}だねって、通りかかる度に言ってもらえます。

「何でもない日常が、実際は一番幸せだね」

水月がしみじみと言うの、よくわかる気がします。今がずっと、続けばいいなって。

一緒にこの世界を変えよう。そんな風に、最初は言ってたミサキすら、学園の外の街でばったり出会った時に苦笑いました。

「いや、ここ、ほんとに便利がいいよねえ？　ボクも正直、格斗様と今みたいにいられたらもういいかな、なんて考える日が増えたよ」

駅前の商店街で、ミサキは格斗への誕生日プレゼントを探してました。

確か格斗って、十一月生まれなんだよね。でも何を買ったらいいか全然わからないって言うから、一緒に色んなお店を商店街で回りました。

「わたしと会う前は、そう思わなかったの？」

「そうなんだよね。何でかあの日は、紫音を見て急に思ったんだ。時が来たんだ、って」

何の時？　と聞いても、思い出せない、と首を傾げるミサキです。まるでこの夢の世界に、段々洗脳されていくみたいに。

「ハッピーエンドは正義！　って誰かが常にささやくんだ。ネコハには聴こえない？」

「ううん……そんな変なことはないよ？」

そっか、とちょっと、肩を落としたミサキ。首には前にはよくつけてた黒いチョーカーがなくて、大事な物そうだったのに、どうしたのかな？　とわたしは思いました。

「でも、時々……急に凄く、淋しくなるの」

せっかく格斗へのプレゼントを買ったのに、しょぼんとした様子のまま、ミサキが両手を見つめて呟きます。

「大事な何かが沢山足りないのに、今が幸せだから、もういいって思ってるみたい。でも本当は、これでいいはずがないのに、って」

「……—」

「ボクが欲張りなだけかもしれない。でも、何が足りないのか、せめて思い出したいのに……思い出したら、全てが終わりそうで」

世界を変えよう。そう言ったミサキですら、それが不安だなんて……幸せって、まるで、みんなを臆病にする薬なのかな。

紫音に会いたいな。早く学園に行きたい、そう思いました。

この世界が夢のようとか、そんな思いも忘れるくらいに、時間が過ぎてしまえばいい。幸せが当たり前になればって。

この日々になんか、終わらせる理由はない。そう思ったから、その誰かの言葉は不意に、わたしの不安も呼び起こしました。

——汐ノ香が怪しい。汐ノ香だけここにいるのは変だ。

怪しい気配。今日まで色々、学園で感じるところは全部探しました。でも、この世界が悪いものって、決める理由はなかったんです。

でもまだ、この声のことは探していない。この夢にいていいんだって、わたしが心から安心するには、一つだけ残った心配の種。

「えっと……汐ノ香は、ユウヤと同じクラス」

それはずっと覚えてました。だって確か、汐ノ香がわたしを、この夢に誘ったから。

その黒い髪の子の天使のヒトがわたしを呼んだ記憶は、きっとここに、もう一人、わたしを呼んだはずの誰かがいないからでした。

——どうしてここに来たの？ 天使さん。

わたしは、わたしの望みなら何になっても同じ、そう答えた気がする。そんなわたしに、あなたは自分に嘘をついても守るのね、って、そのヒトは悲しそうに言っていました。

「違う……そんなヒトは、どこにもいない」

印象が強かったのは汐ノ香です。紅い瞳と、黒くて長いツインテールの天使。

——ありがとう、楡猫羽。あなたの消える、この世界を選んでくれて。

あれ……でも、わたしは消えてないような。

どっちの記憶も、何かがおかしい。でも、その正体を突き詰めなんてしない。だって、わたしが夢の中にいるのは同じだから。

そう思いながら、次の平日のお昼休みに、屋上で悠夜に尋ねました。悠夜と同じクラスの漣^{さざなみ} 汐ノ香さんに、会うことはできる？ と。

「漣……汐ノ香さん……？」

そこでわたしは、きっとここでは知ってはいけなかった夢の代償。世界の生け贄の存在に気が付くことになります。

「そんなヒト、いましたっけ？ 猫羽さん」

「え……ユウヤ……？」

汐ノ香とは故郷で知り合いの悠夜。なのに悠夜の声には、何の嘘もありませんでした。おかしい。絶対におかしい。

屋上を一人で駆け下りて行って、わたしはすぐに職員室の、白^{しろ}先生の所に行きます。

お昼休みで、他の先生はあまりいなくて、怪しまれずにすぐに調べてもらえました。三年A組に漣汐ノ香、そんな生徒はいない事を。

「漣、その姓からしてあからさまだね。でもこのさざなみ学園にはいないということは、余計におかしな事態だとは僕も思うよ」

本当におかしいんです。それだといった、誰がわたしをこの夢に誘ったんだろう？

思えばきっと、どちらもいないから、両方の記憶が消え残ってます。どちらかがここにいれば、その記憶だけが正当になるはずで。

「汐ノ香がない.....なのに、いないことを、わたしはわかってる.....」

わたしだって、全てをごまかされるわたしだけじゃなくて。何一つ根拠のない記憶を、捏造まではできない。いくら夢の世界でも、わたしの中に存在しない夢は見られない。

ここが夢でも、別にいいって。心からそう思うためには、これが夢だと確信がいるはずです。

わたしをここに引き込んだヒトがいることを、忘れては成立しなくなるのがこの夢。
「消えたヒトがいるんだ、この夢の中は.....消えたことも、みんなから忘れられるヒトが」

それはわたしの、完全な転機でした。本当にこの夢は悪くないと、思っていたのかって。
汐ノ香がないのなら。わたしが夢の中に堕ちたあの時、他にも関わったヒトの姿が、はっきりそこで浮かびました。

——あちゃあ.....天気雨だ.....。

晴れてるのにぽつぽつと雨が降ってる林で、故郷に帰ってるはずなのに、わたしの近くに現れたヒト。

その姿は、紫音にそっくりで。

——え.....な、ぎ.....？

紫音と髪の色がちょっとだけ違って、制服もさざなみ学園のものじゃなくって。日本でセーラー服と言われる姿で、そのヒトは林の奥にわたしを誘いました。

でもそんなヒトは、ここにはいない。そばにいてくれるのは、ほぼ同じ姿の紫音です。

——オレは探してるんだ。猫羽ちゃんがこの道を選んだことに、理由はあるはずだって。

ミサキと同じように、夢に慣れていく前の紫音は、最初にそう言っていました。わたしを迎えにいけと、水月に言われたはずなのに。

じゃあわたしを、この夢にいさせるのは、ひょっとして初めから紫音？ でも.....。

——前のオレなら駄目だったかな。水月こそ諦めてたのに、猫羽ちゃんを起こしたんだ。

あの紫音の哀しそうな顔には、意味がある。いつもわたしに笑ってくれて、わたしが幸せであるようにって、紫音は願ってくれてる。

それだけは信じられるから。紫音の目的が何でも、まずきこう、ってわたしは決めます。

幸せな学園生活のために、と消えたヒトがもしも沢山いるなら。この夢は多分、そんな手放しで良い夢じゃないと思う。

わかるだけでも、汐ノ香となぎ。それと、汐ノ香が怪しい、と言っていった誰か。
 重い顔で、一年A組の教室に入りました。猫羽ちゃん？ と紫音が、わたしの様子が
 変なことにすぐに気が付きます。
 一限目をさぼって、紫音と屋上に出ました。わたしはまっすぐ、紫音にききます。
 「紫音。汐ノ香、もしくはなぎって名前に、心当たりはある？」

ぼかん、と紫音はわたしを見ました。なぎと唯一同じ色の、水葵色の目で。
 紫音はかなり不思議そうに、そっち？ と、右ポニーテールを揺らして首を傾げま
 した。
 「ああでも、そっか。猫羽ちゃんが眠った後のことなんて、わかるわけもなかったよね」
 何だろう、紫音。なぎと同じ姿のはずが、なぎとの縁が、紫音の中に全然浮かびませ
 ん。それはわたし、直観で気配を感じてるから。

「汐ノ香に、なぎ……ごめん、凄く重要な話で、多分オレとも縁が深いのはわかるのに。
 今、答えられる話はないよ、猫羽ちゃん」
 紫音は嘘をついてません。わたしに言ってない事はあるけど、それは今の話とは無
 関係。
 とりあえず、わかりました。あ、犯人さんは、紫音じゃなかったって。

＊

この夢には沢山、消えたヒトがいること。そっちの話にはすぐに、紫音は頷きました。
 「水月と烙斗が把握してるだけでも、五人。他にも汐ノ香となぎが消えてるってことだね。
 夢の外では大体害はないから、猫羽ちゃんに言うのはやめておこうって話してたんだ」
 何それ……そんなにもここには、足りないヒトがいたの？ 頭がぐらぐらします。
 「どうして紫音達には、それがわかるの？」
 「オレ達、既に外に出たさざなみだからさ。同じシステムを利用して、ここにも来たし」
 あ、水月は少し違うけど、と加えます。
 ううう……さざなみって、どういうこと？

紫音の所に、水月からのお使いの、小さな蝙蝠^{こうもり}さんが来ました。汐ノ香となぎのこと、
 水月に確かめるって言ったから、お返事かな。
 「なるほど。汐ノ香と水葵^{なぎ}、いないけどいるカウントだって。生け贄なのは当たってるよ」
 「生け贄……って……」
 「ここにはね、猫羽ちゃん。いるはずのヒトがいない代わりに、いないはずのヒトがいる。
 いないはずのヒトが、大体さざなみ。運命が固定すれば、さざなみもヒトになるけどね」
 わたしにわかりやすいように、紫音は凄く言葉を選んでくれます。要するに、いな
 いはずのヒトをいさせるには、いるはずのヒトの生け贄——交換が必要。そんなお話で
 した。

「紫音達は、夢の外からここに来たの？」

「そう。烙印が見つくて、水月が神器。オレと風漓が元々さざなみで、オレ達が出た外の世界のために、ここに改めて来た感じ」

いつも笑顔だった紫音が、ずっと真面目な顔でお話してます。これが紫音の本当なんだ。何でだろう。わたしは知ってた気がする。

「紫音達はどうして、ここに来たの？」

「ごめん、それだけは言えないんだ。だから今まで隠してたから」

辛そうに、蒼い目を逸らしちゃいました。直観では何となく、わたしのためっぴいなあ。

「もしも猫羽ちゃんに、オレに秘密があって、それを言えばオレが消えると知ってたら？」

「それは.....言えないね、うん」

「そういうこと。オレ達は猫羽ちゃんのこと、ずっと起こしたいと思ってた。でもオレは、それが本当に正しいのかも、悩んでた感じ」

じゃあ、汐ノ香となぎ以外で消えたヒト達のことは？

そうきいたら、紫音達がここに来るために、代わってもらったヒトみたい。でも紫音達は紫音、風漓おねえちゃん、烙印、水月の四人で、消えたのは五人。.....？

「そっか。紫音達の世界では、わたしは夢の中にいて、眠ってるんだね」

とりあえず、わたしに関する重要な情報はそれだよね。大体わかりかけてたことだけど、裏付けがとれると実感の度合いが違いました。

ここはさざなみの夢の世界。メインが学園だから、夢を創った犯人さんは園長先生？それは元々のはずだから、特に他には事件はなくて、ただ、困ることは一つあって――

「運命が固定する.....ここが本当になることも、この先には有り得るの？」

「これだけ歪みが大きいと、ないと思いたいけどね。絶対ではない、って水月は言うよ」

五人、汐ノ香達を加えたら少なくとも七人消えた世界。誰かはわからなくても、背筋がぞっと寒くなりました。

「じゃあ、やっぱり、夢は覚めなきゃ.....」

「オレ達も一応は探してたんだよ。でも今、自力で起きる方法はわかる？ 猫羽ちゃん」
.....ごめんなさい、わかりません。

まず、わたしさえ起きればいいのかも怪しい、と紫音は言います。

「学園世界なんて、猫羽ちゃんの世界観にはないものだって烙印が言ってた。園長先生は確かにさざなみのボスだろうけど、誰の夢を使ってここを創ったかを見つけないとなの」

そうなんだ.....確かにわたし、学校のことはよくわかりません。探偵や日本のことは、ちょっとは勉強したつもりだけど。

「誰の夢か.....かあ.....」

初めに思い浮かんだのは、ミサキでした。

――ここ、ほんとに便利がいいよねえ？

ハッピーエンドは正義。誰かがそう囁く。

世界を変えようって言ってたけど、今では夢にいたがってるミサキ。ミサキにとって、願いが叶った夢なら、それも無理はないよね。

思ったことをそのまま紫音に伝えて、まずミサキと話してみるね、と、その日の相談は終わりにしました。

引き続きわたしと紫音は、夢の捜査を続けることを約束して。

「でも紫音は……夢を終わらせることが目的では、なさそうだよな……」

わたしには秘密と言った、ここに来た目的。夢の捜査はその目的に^{かな}適うだけで、終わりにするかは、わたしが決めればいいと思ってる。

わたしを起こすことが、正しいのか。その言葉の重い意味を、わたしはまだ知りません。

お昼休みにまっすぐ、一年D組に行きます。話がある、とミサキを呼んで、屋上には多分悠夜や烙斗達がいるから、ちょっと悩んで、保健室にミサキと一緒に行きました。

「で。邪魔が入らないか俺に見張ってろ、と」

黒い髪と眼で真っ黒な保健の先生をお願いします。ミサキはちょっと、怯えてました。

「ネコハ、怖い顔してどうしたの……？」

もうすっかり、学園生活をエンジョイ中のミサキ。何だか意外に、わたしよりチョロイのかな、ミサキって……。

とりあえず、この世界は夢だと、ミサキも多分知ってることを改めて話しました。

「それで……誰の夢かわからなくて、ボクの夢じゃない？　ということ？」

ボク、ここを変えようって言ったのに？　ミサキが不思議そうに首を傾げます。

「でも確かに、誰の夢かってまでは、ボクも知らないや。え、ボク自身の夢でした、ってオチもまさか有り得る……？」

ほんとだね。そう言えば、どうやって誰の夢かを確信すればいいんだろう……。

でもまずわたしは、もっと早くそうすれば良かった、わたしの探偵物語を始めます。

「とりあえず、ミサキは何者？　どうして、この世界を変えようとわたしに言ったの？」

ずっと逃げてきたお話。多分ここからです。

「あはは一、だから、思い出せなくなったの。ボクもそれ、考えなきゃいけないんだけど」

「首輪。どうして外してるの、ミサキ」

え？　と、学生服しか着てないミサキを、わたしはまっすぐに見つめます。

「ミサキの大事な眼のはずなのに。わたしと同じで、眼をつぶったんだね、ミサキは」

が一ん、と。自分が黒いチョーカーをしてないこと自体、ミサキは忘れてたようです。

「そういうことかあ……この夢が実際、本当にボクの夢かはわからないけど……」

犯人は多分、ボクの首輪を持ってる奴だ。失くしたと気付いてなかったけど、つけないことは有り得ない、と言ったミサキでした。

ここのところずっと、大事なチョーカーをつけてなかったミサキ。それがあれば、夢に侵蝕されないはずの特別な外付けの眼です。

「じゃあ当面は、ミサキの首輪を探せ、だね」

午後の授業は教室に戻って、紫音に結果を報告しました。紫音が不思議そうにします。「にしても、どうして猫羽ちゃん、その首輪がミサキの眼だってわかったの？」

あれ、ほんとだね？ 風滴おねえちゃんがミサキに詰め寄った時、チョーカーの力を、何かに使った気配は感じてたけど……。

「格斗はミサキを、いどこだって言うけどさ。そんなのいたっけな？ って水月は言うし、ミサキが何者かはオレ達も知らないんだよ」

だから紫音は転校の時、ミサキに近付いて、わたしを呼ぶ仲介役を引き受けたんだって。わたしよりも、ミサキを調べたかったみたい。

「格斗はミサキのこと、教えてくれないの？」

「そっ。何でか笑顔でダンマリ」

今まで以上にどっちつかず、なんて格斗が言われる理由らしいです。紫音達の目的には害がないよ、とは言うんだって。

ボク口調で碎けてるミサキなのに、格斗のことだけは格斗様と呼んでる。プレゼントを買った時にも、何だかほにかむ感じでした。

「思い出したら、全てが終わりそう、って。ミサキはそう言ってたけど……」

そこには紫音も、ちょっと不憫げにします。

でも格斗がいとこって言った時、嘘の気配はなかったんだよね。嘘じゃないからって、本当とも言い切れないのはあるんだけど。

高校が終わって、紫音と一緒に学園の外に出ました。三年生とは少しだけ終わる時間が違うから、大体こうして紫音と帰ります。

「そう言えば、紫音達はどこに住んでるの？」

いつもわたしを下宿のマンションに送ると、またね、って去っていくんだよね。紫音も、他のみんなも、ひょっとしてわたしを守ってくれてる感じだったのかな？

「オレ達は、格斗が前に借りてたアパート。そこがぎりぎり、オレ達がいられる可能性のある場所として引き伸ばしてるの」

一瞬、何でか、紅い小さな花が沢山集まる一振りの枝が、わたしの脳裏をよぎりました。

「タニウツギ——……水葵の、アパート……」

「……猫羽ちゃん？」

紫音が首を傾げます。下宿に向かう坂で止まったわたしを、不思議そうに見ます。

「ねえ。わたし、紫音達の所、見てみたいな」

何で？ と目を丸くしてるけど、駄目ではないみたいです。駅まで降りて、更に反対の方に行くから遠いよ、と忠告されます。

そこに何かがある、と思ったんじゃないくて。

わたしは紫音達のこと、何も知らないって、気持ちが落ち込んできたの。紫音達はわたしのことを、起こしたいと思ってくれてるのに。

向かう途中で、近道だよって、駅の裏側を通った時のことでした。

「白☐先生……！　そんな……困ります」

慌てて紫音が、建物の陰にいるわたしと、紫音の気配を両方隠してくれます。冴えないビルの前に、白☐先生と刈奈先生がいました。

「困りますか？　僕は、真剣なんですけど」

「わ、私は、そんな……先生のような方に、良いと思ってもらえるところなんて……」

あ。片手を胸の高さだけど、壁ドンです。

「担任と学年主任と陸上部顧問と園長秘書をこなせる貴女が、どうしてそう謙虚なんです」

白☐先生、本当に憧れの目です。シゴデキ好きかあ、と紫音が感心して呟いてます。

「いくらでも待ちますから。貴女がいつか、僕を心に置いていいと思ってくれる日まで」

しん、となったので、わたしと紫音は目を合わせて、路地裏から静かに逃げ出しました。多分これ以上、邪魔しちゃダメだよね、って。

刈奈先生、嫌そうではなかったけど、他に気になるヒトがいる感じだった。しかも一瞬、烙斗を思い浮かべてたんだけど……。

紫音に言うと、烙斗への凄い視線を含めて、後で事情聴取しよって話になっちゃいました。

「でもあれ、ハクガせんせー、夢が終わるの絶対邪魔してきそう……」

わたしもそう思いました。この夢を今後、どうすればいいのか、悩みがいっぱいです。



<https://slib.net/116211>

★③★ 十二月

汐ノ香となぎが、いないけどいるカウントだって。水月がどういう意味で言ったのか、紫音にはわからないって言うから、お昼休みの屋上で水月にきこうと思ってました。

なのにあれから、格斗と水月が全然屋上に来なくなっちゃって。しょぼん、とする風滴おねえちゃんと、悠夜と紫音とのお昼休みが十二月になるまで続きました。

「ごめんね、猫羽。格斗も水月も、園長先生に目をつけられちゃったみたいで……」

外からの侵入者っていう、三年D組のみんな。園長先生が二人を連れていっちゃったみたい。

「でもあれ、好みの生徒を侍らせてるよーにしかオレには見えないんだけど」

園長先生は女性です。空色の長い髪が綺麗で、学園理事長も兼ねてるってききます。「格斗さんは女生徒とだけでなく、教職員の何人かとも噂になったことがありますしね」

悠夜はいつになく苦い顔です。大体の噂は、格斗と仲良くなりたい人が勝手に流したものだって言うけど、格斗さんが誰にもすぐ気をもたせるからですよ、と言い切る悠夜です。

刈奈先生には初めは、ミサキをよろしく、と言って格斗は近付いたんだって。先生って綺麗だね、眼鏡の下の神秘的な青の目をそのまま見せてほしい、とか言って。

「格斗さんと水月君を、連れて歩く園長先生。趣味だったら酷い公私混同ですね……」

悠夜はD組のみんなの事情を知りません。わたしも実際知らないようなものなんだけど、学園世界を変えてしまいかねない格斗達を、園長先生が拘束してるなら怖い話だよな。

屋上から降りて二人になってから、紫音が難しい顔でわたしに言いました。

「どうせいつかは、喧嘩売らなきゃいけない相手だと思うし。さざなみの園長、そろそろ事情聴取しに言ってみる？ 猫羽ちゃん」

えっと、紫音それ、ラスボスにチャレンジしようって言うてるよね……。格斗と水月を取られて、心配してるのはわかるんだけど。

でもまあ、ミサキの首輪も見つからないし、ここが誰の夢かもわからないし。わたし達はそろそろ打つ手がなくて、覚悟を決めないといけないのは何となくわかりました。

探偵なんだし、何か推理を持っていきたいな。園長先生とお話するのに、材料なしって無謀過ぎると思う。

「ねえ、紫音。白○先生にきけば、この学園にいる他のチルダは、全員わかるかな？」

ただ一人のプライム生と、数人のチルダ。何でそんなこと？ と紫音が目を丸くします。

「わたしも全然、確信はないんだけど……」

初めは微かな疑問でした。でももし、この胸騒ぎに、こたえが得られるのだとしたら。

園長秘書もしてる刈奈先生にお願いして、園長先生と面談させてもらう約束をしました。

理由を聞かれるかなって緊張してたんだけど、黒縁眼鏡をずらした刈奈先生は、いっ
になく大人の笑顔で「任せて下さい」と言いました。

何か、このために園長秘書をしてたんです、と楽しげな黒いスーツの背中だったんだ
けど。

「白^く先生にも既に怪しまれてるけどなー。オレと猫羽ちゃんもこれからは、利害が一致
しない覚悟でいた方がいいよ」

夢を終わらせる以外の目的があった紫音。

うん、とわたしも頷きます。まだ夢をどうするのかも、何もわからないわたしだから。

時間になって、園長先生の執務室に二人で呼ばれました。中に入ると、烙斗と水月が、
後ろに騎士みたいに立たされてました。

「いらっしやい。可愛いうちの生徒ちゃん達」

机の上で手を組んで座る園長先生。空色の髪と、悪魔みたいにキレイな鋭い笑顔。

一瞬、わたしは、ぐらりと倒れそうになりました。

「猫羽ちゃん！？」

何でそうなったのか、烙斗は哀しげな顔でわたしを見つめます。

わたしにはまだ、何もわからないけど。ただ、わたしの中で、何か大きなスイッチが
入ったことはわかりました。

ここからが本番。感じないようにしてきた世界の姿を、はっきりと観る時です。

夢は夢である方がいいよ、って。目の前が暗転した時、知らない黒い髪のヒトが、闇
の中で淋しげにわたしに言いました。

ここが夢だから、本当は何もかもが曖昧で、推理も証拠も意味のないもの。でも今日
は、園長先生を追い詰めるためじゃなく、わたしがこの世界に納得するために来たん
です。

「それで、可愛い生徒ちゃん達。わざわざ私と話したいのは、何の用件かな？」

確実に悪魔の気配を持つ園長先生。悪魔は誰でも、何からでもなれるから。何でかこ
の女のヒトの声は、わたしの胸を痛ませます。

「……あと二人のチルダの漣^{さざなみ} 汐ノ香と、春日美咲はどこにいるんですか？ 葦津先生」

すぐに切り出したわたしに、園長先生は、おや、と青白い目を面白そうに細めました。

「誰も、三年C組の漣汐ノ香と、三年D組の春日美咲を知りません。チルダは有名なのに」

それはわたしの、ごく初歩的な疑問でした。

世界を変えようと言ったミサキも、外から入ってきたというD組の四人も。この世界にいないはずのヒト達ってお話を信じるなら、生け贄のルールも考えないといけない。

「確かにおかしい話だね。その二人の名前は私もよく覚えているよ」

記録にだけはしっかり残る、消えたチルダ。もしも本来いないチルダとプライムが新たに来れば、交換されたのは誰だったのか。

悠夜と同じA組と思ってた汐ノ香が、何でC組なのかとか、春日美咲は何でミサキと名前が同じなのかとか、わからない所だらけ。

でもまず、この二人は何処に消えたのか、称号という証拠についてわたしは尋ねました。

この世界は本当に、チルダとチルダ、またはチルダとプライムを交換するとか、近い誰かを生け贄にしないと出入りできない場所であるかどうかを。

「ふむ。まだこちらに在る可能性が高いからアポスト枠には入れないでいた二人だけど、その称号が証拠にされてしまうとはね」

座ったままで、楽しそうな先生。アポスト枠、と聞いて、今度は紫音が震えました。

「オレもききたいんだ。アポスト生にされた茨月^{シヅキセイ}滯は、いったい何処にいったの？」

紫音が泣き出しそうになりました。ずっと我慢してたみたいに、心配が一杯の声で。

「アポストの名簿も見せてもらった。橘^{なぎ}水葵、山科^{やましなつばめ}燕雨、氷輪^{ひわよくる}翼輪、これがオレと烙斗と、水月の生け贄でしょ。でも何でシヅキまで？ シヅキは何の関係もない、ただの人間なのに」

誰なんだろう、茨月滯って。紫音がここに來た本当の理由は、そのヒトのことみたい。

「そこまで把握したなんて、君達は優秀だね。やっぱり君達も、私の傍仕えにしたいな」

園長先生の後ろから動けない烙斗と水月。何だか弱みでも掴まれたみたいな顔。

「チルダでもアポストでも、生け贄ならもうここにいると言えば、君達は目を覚ます？

それは少々、惜しい気がするな」

「……わたし達が夢から覚めても、葦津先生は特に困らない？」

「それは誰が、この夢の主かによるね。私はできれば、大波が確定するまで続いてほしい」

ああ。ここが夢と認める園長先生は、夢を本当にする気なんだ。沢山の生け贄がいなくなった、この幸せな箱庭のさざなみ学園を。

「駄目、シヅキだけは返して！ 一般日本人のシヅキが、夢の主なわけがないんだから！」

叫ぶ紫音に、烙斗が痛々しげな目をします。反対に園長先生は、とても皮肉に笑いしました。

「本当にそれを望んでしまうの？ 君はその危険性だって、知っているんじゃないかい？」

はっ、と紫音が息を飲んで青い顔をします。

「色々と惜しいから、ちょっとだけヒントをあげよう。それを考えた上で、夢から覚めるというなら、私も引き止めないよ」

さて、と椅子から立ち上がった園長先生が、紫音とわたしのすぐ前まで来て微笑みました。

「私は生徒全員が可愛いんだ。できれば猫も杓子も一緒に、幸せな明日へ駆けて行きたいんだけど」

よしよし、とわたしと紫音両方を撫でます。わたし達が面食らう中で、笑顔で続けました。

「夢は一つとは限らないよ。そもそもこの夢は、元は楡猫羽が見ているはずだったのにね」

意味をきく前に、園長先生が自分の執務室から出ていきました。次の仕事があるから、今日はここまで、と刈奈先生が来て言いました。

烙斗と水月が残ってるから、話していい？ と刈奈先生にきくと、頷いてくれました。「ねえ。何で二人は、園長先生というの？」

何でかわたしは、さっきからずっと、胸がドキドキしてます。山場は一旦済んだのに。

烙斗がわたしから目を逸らすので、水月が苦く笑いながら、のんびりと答えました。

「できればオレ達で、話をつけたかったんだけどね。まあ、主役力不足、って感じ」

何のお話だろう…… 普段なら紫音がすぐにつっこみそうな事なのに、紫音は俯いてます。

一度倒れそうになったあの時から、わたしは体がぐらぐらしたままです。じわりと汗が滲んできて、心臓もまだ早打ちを続けます。

「それは、汐ノ香の問題？ 水月……烙斗」

いないけどいる。水月にききたかったお話。二人が汐ノ香と、どういう関係かもわたしは知らないけど、直観で水月から感じました。

「そう。あと、刈奈先生」

え。振り返ると、刈奈先生が苦く笑います。刈奈先生が眼鏡を取って、髪を下ろしました。透き通る青い目がまるで宝石みたいです。

そして先生は、少し違った声で言いました。

「汐ノ香ちゃんを巻き込んで、すみませんね。でも、彼女はそもそも、埒外の存在なんです」

漣汐ノ香。一人だけはっきり、さざなみの名前を持った天使。何となくだけど、助けるのは無理、というニュアンスが漂ってます。

髪を下ろすと武人みたいな雰囲気になった刈奈先生は、どうしてかわたしに笑いました。

「今の内に、ミサキに接触して下さい。この育て親達はどうにも、過保護なんですよ」

自分を指すように笑う刈奈先生。わたしも感じてたけど、そこにいるのは先生じゃなく、先生と交換で出てきた誰かでした。

きっと、その誰かが普段は、刈奈先生の生け贄で——刈奈先生はミサキを守るためにそばにいた。だから刈奈先生をそのヒトが抑えている間は、わたし達はミサキと決着をつけられるって。

格斗がわたしの手を引っ張って、執務室を出ることになりました。わたしは今も心臓が煩^{うるさ}くって、何だか歩くことまでしんどいです。

「格斗は.....みさきを追い詰めて、いいの？」

「追い詰めるんじゃない。現実を視せるだけ」

あ。いつもと違って、格斗が笑ってない。

「もう、時間がないから。できれば汐ノ香に、少しくらい会わせてやりたかったけど」

一年D組の教室が近付いてきました。大体いつも、放課後には一人でそこにいるミサキ。

C組の横を通り過ぎてD組についた時には、心臓だけでなく頭までわたしは疾走中でした。

普段のわたしなら思い付けないような罨。これからわたしの探偵タイムが加速します。

＊

今日も一人で教室にいたミサキは、格斗がやってきたのを見て、首輪が見つからないよ、と泣きべそをかいて格斗に抱きつきました。

わたし達はそこから色んなヒトに、ミサキの首輪を知らない？ ときいて回りました。「ごめんね、ネコハ。自力で見つけるつもりだったんだけど」

ミサキにはとても大切な黒のチョーカー。格斗に手を引かれるミサキの前を、わたしはずっと黙ってる紫音と一緒に歩き続けます。

来たのは三年D組です。園長先生の所まで行く前に、風滴おねえちゃんは教室で無事な帰りを待ってるね、と言ってくれてたから。

「.....え？ 竜牙さんの、ネコ用首輪.....？」

風滴おねえちゃんが声を止めました。しばらく考えて、知らないよ、と言います。

わたしはそこで、胸がズキン、と一番痛くなってしまいました。

「.....おねえちゃん、だったんだ」

「——え？」

「この夢は、おねえちゃんの夢。そのことをミサキに、気付かれないように.....ミサキの首輪を隠したのは、風滴おねえちゃん、だね」

今まで、わたしと仲良くはしてくれても、静かに存在感を消していた風滴おねえちゃん。

その理由が、わたし自身の胸の中から解る。紫音も辛そうにおねえちゃんを見つめました。

「おねえちゃん。今、ミサキの首輪と言って、黒いチョーカーを思い浮かべたよね」

直観でうっすら感じたその脳裏。わたしが探偵バイトをしていた時には、大体直観頼りで仕事をしていました。

「何も知らない他のヒトは、ネコ用首輪って言うと、鈴のついた小さなベルトを思うんだよ。でもおねえちゃんと格斗だけが、ミサキの首輪が、黒いチョーカーってはっきりイメージした。対ネコハ用、心眼首輪を」

その首輪は格斗が、ミサキに造ってあげた大事な物だったんだって。だからミサキは、失くしたことを隠して一人で探してたから。

格斗以外で黒いチョーカーを思ったのは、聞いた中でおねえちゃんだけでした。

おねえちゃんは困ったような顔で、黙ってしまいます。ミサキに詰め寄った時に首輪は見たかもだし、この話だけだと足りません。

「あのね、おねえちゃん。おねえちゃんが、少し怪しいって、わたしは前から思ってたの」「……—」

「プライムくらいの単語なら、わたしも解る。でも、相似のチルダや省略のアポストロフィ、そんな記号まで覚えてるヒトって、わたし達——異世界侵入者の中には、多分いないの」

わたしの世界観には、学園物なんてない。だからこれは、わたしの夢とは限らないって。

わたしの夢なら、そんな称号のある生徒はきっといない。ぐらつく頭が疾走を続けます。

一度学べば、見た物を綺麗に覚えてしまう天才の風漓おねえちゃん。おねえちゃん以外、この今のさざなみ学園は多分作れないんだ。

ミサキの首輪が駄目押しでした。どうして風漓おねえちゃんが、ミサキの首輪に脅威を感じたのかまでは、わからなかったけど。

わたしも風漓おねえちゃんも俯いたから、格斗が苦しそうな声で、間に入りました。「……返してやってよ。山科燕雨にミサキがあげた物だけど、自分の意志で渡すことと、失くすのではダメージが大きく違うからさ」

それも、ここではあげた過去が山科燕雨と共に消えたから、と。首輪がないことに動揺したミサキを慰める声で、格斗は言いました。

風漓おねえちゃんの蒼い目に、じわりと涙が浮かびました。顔を上げて格斗を見ます。「……嫌です。私だって、持っていたいから」

おねえちゃんの声が変わりました。え、とミサキが、紅い眼を大きく丸くします。「風漓様のせいじゃありません。風漓様は、私を見つけて下さっただけなんです」

アポスト生——生け贄の名簿の中にあった、春日美咲という名前。それはきっと、つい今、風漓おねえちゃんと代わった誰かでした。

「汐ノ香様を連れていこうとして、私を炎獄に置き去りにしたくせに。自分ばかり烙斗様と一緒になんて、ずるいです、私」

ミサキと美咲。禁断の二人が向き合います。

三年D組に行く前に、水月にききました。汐ノ香はいないけど、汐ノ香が使ってた人形はいるんだって。なぎもないけど、なぎの使った人形を紫音が使ってるように、と。

それぞれの生け贄を使って、みんなここにいたみたいです。汐ノ香と同じ黒髪のスィンテールで、紅い眼のミサキが慌てます。

「ボク、ボクを落っことしてた！？ 確かに汐ノ香の人形を使ってるのに、全然女の子に戻れなくて困ってたけど！」

ぶすっと美咲が、顔を膨らませます。烙斗が何も言わないから、わたしが言います。「……自分の名前もわからなくなって、一人ぼっちだったんだね。それは淋しかったよね」

二人の本体は、美咲だと思う。でも美咲は自分が曖昧になって、同じく自分が曖昧な霧が本質の、風漓おねえちゃんに出会ったんだ。

ずっと黙ってた紫音が、やっと喋りました。

「で、ミサキが猫羽ちゃんに近付いた理由は何だったの？ 風漓が首輪を持ってるなら、風漓は当面、夢を続けようと思ったんでしょ」

それは美咲に向かってきています。ミサキと同じヒトなら、どっちにきいてもいいよね。

「私が探す、汐ノ香様の羽を持った紫音様が転校生として顕れたからです。風漓様には、自覚はありません。あなたの羽が汐ノ香様のものと、風漓様は知らなかったから」

しょぼんと美咲が、真相の話を始めました。

「この夢は元々、猫羽様の夢でした。でも、水月様の介入で水燬君が目覚ましてから、風漓様の夢に変わったんです」

……. どういうことだろ？ 水燬って、誰？

「……. 話していいんですか、紫音様」

「——.…….」

紫音が厳しい顔色のままで、わたしの方を振り返りました。烙斗も難しい顔をしています。

わたしはまるで、天井が回るみたいに頭がぐるぐるし始めました。

園長先生に会った時から、何かが悲鳴を上げるような、体の奥が泣き出し始めた、そんな心地の悪さで…….

その重い声は、他ならぬわたしの口から。

「……. 紫音、もういいよ。確かに過酷だけど、猫羽に、いい加減思い出させてあげないと」

わたしが勝手に、知らないヒトの違う声で、紫音の目には突然、大切な姿が映りました。

「——シヅキ!？」

「猫羽のお兄さんなんだろ、山科燕雨って。園長と校長の生け贄は両親。それなのに猫羽は、自分が何で苦しんでるかもわかってない」

手が勝手に、制服の上から胸を押えました。理由もわからず痛み続ける、わたしの心を。

「何で、シヅキ……ずっと探してたのに……猫羽ちゃんと代わるなんて、そんな……」

「紫音は半分、判ってたんだろ。もしここで猫羽の生け贄がおれだったら……現実のおれは、猫羽を生け贄に存在してるのかも、って」

茨月君! と、さっきまで美咲だった風漓おねえちゃんが、真っ青に戻ってきました。

「駄目、茨月君! それだけは言わないで!」

「ありがと、かざり。でも、誤魔化せないよ。現実で猫羽が眠り続けてるのは、おれが世界に存在するためだった……違う?」

わたしの両肩、今は「シヅキ」ってヒトの体に、風漓おねえちゃんがしがみつきます。「違うの、猫羽が眠ってるのは私のせい! 普通の人間だった茨月君は何も関係ない!」

紫音がさっき、シヅキは何処に? と園長先生にきいてたこと。紫音もおねえちゃんも、このヒトを探しにここまで来たんだね。水月に頼んで、炎獄の夢に入ってたまで。

そこでミサキが、黙ってる烙斗の代わりに現実のお話を口にしました。

「……もし、ネコハと君が生け贄の関係なら、どちらかしか存在できない。そういうこと?」

わたしが紫音に、紫音の目的をきいた時にこたえてくれたこと。

——もし猫羽ちゃんに秘密があって、言えばオレが消えると知ってたら?

あれはそのまま、この現実だったんだね。紫音達が探したこのヒトかわたし、片方しか存在できなくて、それをもし言われたら……わたしもこのヒトも、自分じゃない方が存在するのがいいって、そう選ぶと思うから。

「おれは猫羽を、家族の所に戻してやりたい」

園長先生と校長先生の生け贄が、わたしの、両親。二人の姿が、はっきり思い出せない。

でもわたしは校長先生が大好きで、園長先生に初めて会ったさっきは、頭がぐらりとして。

「烙斗も猫羽のお兄さんなんだろ。なのに、猫羽に忘れられたままでいいの?」

烙斗は故郷の知り合い。それ以上のことが、何もわからない。

わたしはずっと、わたしが楡猫羽とわかっていても、わたしの心は何処かに置いてきちゃった……?

「——ああもう！ 我が仮言うな、シヅキ！」

紫音が珍しく本気で怒った声を出しました。いつも明るくて、そして優しいのに、紫音。
「そうだよ、茨月君……！」

「どっちかだけなんて、そんな馬鹿な話！ 確かにシヅキは、ここにいるのに！ 水燬の世界にはいなかったからって、猫羽ちゃんとシヅキ、どっちかしか存在できないなんて、そんな現実はおれ達が叩き潰すの！」

そっか。だからこれは、風漓おねえちゃんの夢なんだ。わたしも、そしてこのヒトも、両方が存在する未来を二人は望んでる。

だって二人は確信してるから。このヒトがいない世界が確かにあった。それはきっと、わたしが元気にしてる方の世界。

「……茨月は過去神器だから。猫羽が未来を選べば、それに合わせて過去を変えてしまう」

烙印がぼつりと眩きました。多分重要な事。

紫音と風漓おねえちゃんが、二人がかりでしがみついたから。たはは、と「シヅキ」のヒトは、左ポニーテールの頭をかきました。

「これ、夢の外だと、おれも猫羽も昏睡中の状態なんだろうなー……」

きっと、このヒトといたから、わたしにもアポストロフィとか難しい言葉が判りました。おれ口調だけど、わたしの黒髪とブレザーは、このヒトの女子高校生姿みたいです。今回は男女不明なヒトが多いね？

がらっと、そこで教室の扉が開きました。

「あ、瀬君が起きてる。良かった、これで、瀬君も猫羽も意識だけは取り戻したね」

後一人の侵入者、水月。赤い目が光ります。

それじゃ、行こっか、と水月が軽く言ったから、何処に？ とみんなが水月を見ました。

水月はのんびり、優しい悪魔の笑い顔です。

「猫羽を、戻してあげないと。元々、瀬君を呼んだのは猫羽だろうけど、瀬君がここまで猫羽の心を映せるとは思わなかったよ」

月属性って、やっぱり凄いね。水月自身が月の名を持ってるのに、そんな風に言います。

紫音が焦って、水月に飛びつきました。

「待って、水月！ それだと二人は……！」

「まあまあ。それは、考え過ぎ、紫音」

え？ と、風漓おねえちゃんも首を傾げます。

そうして水月は、始まりの場に、わたし達を導いていくのでした。



<https://slib.net/116360>

★終曲

生け贄システムは、本来さざなみが入り出す時だけのルール、と水月が言いました。「でも、本当にさざなみそのものなヒトは、学園内では汐ノ香しかなかったよ」

D組の教室を出て隣の教室の前まで、歩くのもあっという間。一年C組の扉を、開ける前に立ち止まって色々話してくれます。

わたしから代わったヒト、「シヅキ」な瀬が、わたしと同じ疑問を口にします。「でもかざりや烙鏝、それに水月は、おれを助けにこの夢の中まで来てくれたんだろ？ 生け贄もいたって、さっき言ってたのに」

「それ。炎獄に外から自分の意志で侵入したヒトは、本来、さざなみではないんだよね」

だってさざなみの本質は、谷底に追放され悪魔に捧げられる生け贄だから。さざなみのルールを利用して炎獄に入ったヒトは、素因は持ってもさざなみの天使ではないんだって。

「加えて、預言の力を持つ魔竜やその子供が宿命を変えたことで、大きく姿を変えられたものは大波。運命は沢山分岐しても、個々の本質に関わる宿命はそうそう変わらないのに、そこを変えちゃう規格外がいるんだよねえ」

ごく、っとミサキが判りやすく動揺します。でも今回はミサキでなくて、瀬が特殊なヒトだった事、それが大きいと水月は続けました。

「瀬君なら猫羽を起こせると、オレは思って。夢の外では、オレに魂を渡して猫羽はずっと眠りについてる。風漓は猫羽を助けたくて、闇から出て猫羽の代わりをして生きてきた。そんな風漓を瀬君は好きになって、眠る猫羽に出会った。それは確かに、猫羽がこの世界、瀬君が顕れる現実を選んだ結果ではあるよ」

わたしの選択で瀬が顕れる。または消える。じゃあその逆の、瀬が消えたらわたしが戻る、それを水月は試した……わけではないみたい。

「瀬君が猫羽の選択に存在を左右されるのは確かなんだけどね？ それは猫羽が、オレを——ひいては紫音を存在させるかどうか、が鍵になるの。セイは、シオンの鏡、だから」

何だろう。水月がいないと紫音がいなくて、それで瀬がいなくなるってお話みたいです。

「だから、オレが水月でなく水燬に戻る世界では、紫音も瀬君もいなくなっちゃう。今のオレも猫羽に魂を還せば、水月ではなくなる」

ふう、と。水月が教室の扉に手をかけます。

それは結局、わたしがわたしの魂を戻せば、紫音と瀬が消える結末に聴こえるけど……。

紫音に考え過ぎ、と言った水月が、静かに一年C組の扉を開けました。
 「このD組のオレは、水燬には戻れないよ。猫羽を起こせば、今度はオレが眠るだけで」
 教室には見えない白い部屋のC組。そこにいたのは葦津先生達と、そして……。
 「猫羽……！」

風漓おねえちゃんが、白い部屋の壁の方にあるベッドに駆けつけました。横にある丸い椅子には校長先生が座って、反対側の壁には園長先生がもたれかかって立ってます。

ベッドには大きな点滴の管と共に、紫苑色の髪のがたしが眠ってました。
 これが本来の、わたし——一年C組の、楡猫羽みたいです。
 「あ、来たんだ、君達。ずっと待っていたよ」
 園長先生……口調や中身は違うヒトでも、姿はわたしの母さんな空色の長い髪。口元は微笑んでいても、青色の目が悲しそうです。
 「真相に辿りつけたようで何より。茨月君を起こせたなら、この過去も変えられるから」

は？ と、わたしと一緒にいてくれる漣が、一気に動揺して園長先生を見つめました。
 「お、おれですか！？ 何が！？」
 「水月からきいてないの？ 君は世界の理に反する神器で、未来の出来事で過去を変える反則の業があるのに」

過去が変わって未来が変わるのが、普通の運命改変……それも禁忌だけど。でも漣にはその逆、説明不可能な神秘があるみたいです。
 「猫羽は風漓が代わりになれば、もう目覚めない。それが猫羽というコの本質で、望み」
 わたしのそばにいる方の校長先生——体は父さんが、黙ったままで、眠るわたしの手を握りました。彩のない灰色の眼で。

園長先生は、でも、とお話を続けます。
 「茨月君は、この夢で猫羽と代わった。何の接点もない二人なのに、茨月君は猫羽の心に、まだ唯一手の届く人なんだよ」
 だからわたしが、こうしてわたしの意識を今持ってるんだって。本当のわたしはベッドで眠ったままなのに、不思議なことだよ？
 「と言われたって……おれ、全然普通の人間なのに、おれにどうしろって……」
 園長先生だけでなく、みんなからの視線に漣が困ってます。
 そうだよ、わたしも直観や悪魔を使うこと以外は何もできない人間で、だから漣に馴染んでたんだと思うし。

校長先生が立ちました、漣の方を向きます。
 「……猫羽を、起こしてくれて、ありがとう」
 ベッドの足下に立ってた漣の、すぐ前まで来ます。その顔は本当に知ったはずのヒト。
 壁際の園長先生が、からからと笑います。
 「大丈夫だって。茨月君は、私達の生け贄が猫羽の親だってわかったくらい、猫羽の心を掴んで記憶を得られてるからね」

硬直する澪の前まで来ると、眼鏡を外した校長先生は、おもむろに手を差し出して……。

ばさり、と。手刀だけで、わたし達の黒い、左ポニーテールが丸ごと切られました。「え……おれ、何された……？」

しょ、傷害罪……。咄く澪の中で、わたしは意識が落ちました。舞台が暗転するみたいに。

次に目を開けた時には、雑然と短くなった黒髪を鬱陶しそうにしてる澪と、不安そうな顔の風漓おねえちゃんが、ベッドのすぐ横に座ってわたしを見守ってました。

もっと後ろの方には、燕雨兄さんと赤い目の銀髪のヒトに、父さんと母さん、それに、水葵の人形と汐ノ香の人形を使う二人。

記憶がしばらく混乱してて、水月と紫音と、葦津先生達。澪と風漓おねえちゃん、ミサキ。あと、燕雨兄さんになってるラクトが父さんの仲間だって、やっと思い出しました。「……目が覚めて、本当に良かった」

父さんが来て、わたしを抱きしめました。きっとわたしを助けるために、母さんと二人、炎獄にまで来てくれた父さん。

「ネコハの移動、ボクがやれば良かったのに。わざわざさざなみ素因を拾って、流^る惟^いさんと二人、ボスに乗っ取られてまで炎獄に来る？」

風の翼。炎獄の素因を持つミサキが、ボクだけで良かったのに、と不満げです。父さんの肩越しに、わたしはミサキにまず言います。

「久しぶりだね、ミサキ。あの時はラクトの灰で、兄さんを助けてくれてありがとう」

燕雨兄さんと代わったラクト。ミサキが昔、ラクトの灰の火酒を造って、それを魂の助けにした兄さんがラクトの依代になったんだ。ミサキの首輪もその時兄さんは貰ってたよね。

兄さんの命が一度尽きた大きな事変の時、兄さんを留めてくれたもの。命の翼を分けてくれた氷輪君がいません。水月がここにいる代わりに、氷輪君は不在中みたいです。

風漓おねえちゃんに首輪を返してもらったミサキは、照れくさそうに笑いました。「忘れてたけど、そうだったよね。ネコハがボクを見つけて、悪魔召喚の儀で連れ出してくれた。おかげで少しの間だけでも、ラクトお父さんと一緒に外の世界でいられた」

ミサキは、流帷母さんの姉妹のようなヒトから生まれるはずだった子供。だからわたしや兄さんにはいここ。元の姿は美咲で、今は風漓おねえちゃんがお洒落をしてるね。

父さんがわたしを離して、今度はわたしに風漓おねえちゃんが抱きつきます。

「おねえちゃん。それに美咲も、ごめんね？」

ふるふる、とおねえちゃんは首を振ります。

「ねえ、美咲。ミサキに戻ってあげて。遅くなって悪かったけど、美咲は美咲。春日美咲」

ここでは名前もわからなくて、炎獄にいた女の子の美咲。本当の名もわたしは知ってるけど、ミサキの所に戻るには、まずこっち。

「風漓おねえちゃんは、美咲が継がなかったラクトの霧で。霧のミストと、光を咲かせる咲で美咲なんだよ。そして春日が、美咲の光」

召喚の時に、その縁を感じてつけた名前。不思議とここだと、合ってる確信があります。

「だから美咲には、おねえちゃんは心が近いヒトでも。ミサキには美咲が必要だよ」

むう、と、おねえちゃんの中で美咲が不服そうです。でもしぶしぶと、頷いてました。

今度は紫音と澪がわたしの前に立ちました。

「それで、猫羽ちゃん。一緒に帰ろうね？ 夢から出たら、現実で目が覚めるはずだし」

「何か、保健室にいったら、夢から覚めれるみたいだって。おれも全然、意味不明だけど」

夢の外——橘診療所から来た紫音達。元は澪が昏睡になって、診療所に運ばれたみたい。

ちらりと、姿は父さんと母さんだけど、中のヒトは葦津先生な二人を見ます。園長先生は笑って、校長先生は溜め息をつきました。

「別に帰って全然いいよ？ でも猫羽はまだ、帰らない気だよね。知ってる」

えっ！ 紫音と風漓おねちゃんが焦って、葦津先生達とわたしを交互に見ます。

「うん。わたし、まず汐ノ香を探したいの」

もう起きたから、後はいつでも外に帰れるよね？ ときくと、園長先生は頷きました。

「わたしが帰ると、今度は水月が眠りにつく。汐ノ香がいたら大丈夫な気がするの。それにミサキもラクトも、汐ノ香が心配でしょ？」

ええええー！ 紫音が大ブーイングです。

「猫羽ちゃんとシヅキが共存できるなら何も遠慮しなくていいのに！ 水月なんてどうせ毎日引きこもって寝てるだけだし！」

「紫音、それはひどいって……おれも早く、猫羽の目が覚めてほしいけど、ここでないとできないこともありそうだしさ？」

わたしと長く一緒にいただけあって、澪はわたしの望みが解るみたい。後ろの方で水月は、主役力だねえ、と穏やかに笑ってます。

「あのね。わたし、生け贄がいつも見えてた。ミサキも美咲も、葦津先生達の姿も」

今だから判るけど、紫音にはわたしが澪に見えてなかった。だから澪と代わった時に、驚いてた。わたしは自分が澪に見えてたのに。

わたしや紫音、おねえちゃんを、校長先生は前に紫陽花と言った。みんなの髪が紫苑や青銀、みんな自体の華やかな色で視えてたから。

「わたしなら汐ノ香を探せる。他にも消えたヒトがいれば見つける。だって、探偵だから」

ミサキや父さんの特殊な眼でも、生け贄は見えてなかった。だからわたしがやります。それがわたしが、ここに来た意味の気がする。

起き上がると、体の節々が痛みました。夢の中で目が覚めるって、変な感じです。
まず、体力を取り戻さないとダメみたい。そういうところは現実的で、不便だよね。
「これが夢でも、捜査さえすればいいよね？」

みんなもう、何も言わずに項垂れちゃった。
もう少し、おかしい学園生活を続けます。夢から覚めるのは、その後でも遅くない
よね。

綺想曲 了

綺想曲 裏拍 D+

せっかく己の本体で目覚めた猫羽が、まだ夢に留まることになった。

そうなるだろう、と予想していた彼は、その大きな要因である自身の存在について、猫羽の両親に詫げる。

「いやもうほんとに。燕雨をオレの生け贄にしてることといい、猫羽のサポートできそうにないことといい、マジでごめん」

「いいよ。この夢がないと、お前が消えると心配してたのは俺達もだから」

校長と園長として存在する元仲間は、彼に猫羽の見守りを頼んで夢から出た。現実では既に死者である彼は、苦笑って見送る。

ラクトの名を持った彼。彼を留める燕雨の意識が強い時には、「烙印」を名乗っている。「ってわけで、さざなみ学園、延長戦みたいだけど。ロゼとミサキは、それで良いのか？」
「大丈夫だよ、烙印様。お母さんがいなくて淋しいけど、ネコハはこの時間を延ばすためにも残ってくれたんだから」

末端は赤、中心が黒の翼を生やし、ミサキの口調で答える人形。それは彼が昔に汐ノ香に造った人形だが、灰色の癖毛な美咲の姿に戻ったミサキが、彼の下宿について帰った。

ラクトになる前の、更にかなり大昔の彼の実の子供が美咲で、本名はロゼらしい。彼に記憶はないが、事情は聴いていて文句はない。

「生け贄がいるなんて、本当困った話だよな。オレ、確かに燕雨に憑いてたら、ある程度は現実でも生きられるだろうけど。それやると燕雨の奴、絶対生きるのサボり出すだろ」
「うん、燕雨君は間違いないね。だから誰もこの夢の件、燕雨君と翼掩君に言ってないよ」

その二人は二人で、汐ノ香を探しに炎獄に魔界側から乗り込んだはずだ。生け贄を用意するだけが炎獄に行く手段ではなく、二人が炎獄に行ったから彼はこの夢に出て来れた。「ボクはそれでもいいけど、ネコハは困るね。そもそもこの夢は、烙印様とボクは水燬側で猫羽の夢で、ロゼと風漓さんは水月側なこと、今後は黄昏の泡になるのはどうするんだろ」

淡々と冷たいことを言う人形娘に、はは、と下宿の玄関先で頭を撫でる。

ロゼの心眼が戻っても、ここに在るためには風の翼が必要で、さざなみの風を持つミサキは根がドライだ。

そうでもない、と、彼との別れの時にダメージが大きいだろう。ロゼでなくミサキの状態を維持してひとまず傍にいさせている。彼はまだ、猫羽を生け贄にしてまで炎獄に屈する気はなかった。

「夢は一つとは限らない、らしいからなあ」

安アパートのドアを開けると、彼の下宿であるのに先にヒトがいた。しかも二人共が、我が物顔で狭い1Rでくつろいでいる。

「あ、お帰り。今日から居候、よろしく」

「お世話になります。しかし狭いですね」

ふう。ため息がまず、口をついて出ていた。

黒く長い髪で青い目の女と、白い髪で同じ青の目の男。

澀を探しに来たメンバーが現実には帰った代わりに、居候になった夢の登場人物。

「お前らさ、せめてその辺を掃除するとか、少しはしおらしさを見せたらどうなんだよ」

「そんなこと言っても、私と烙印君の仲だし」

「僕は家事が不得手なんだよね。スカイさんが刈奈先生に代わってくれたら、その辺りは全部解決すると思うんだけどな？」

ばちっ、と、どちらも笑顔だが居候二人の間に火花が散る。

女の方はミサキを守るため来た月夜狼の生け贄で、男は遥か昔からその月夜を探している。強い風を持つので炎獄にも出入りを始めた筋金入りストーカーだった。

「いやですねえ、悪魔に魂を売った風竜は。さっさと学園でさざなみになればどうです」

「スカイさんこそ、生け贄なら生け贄らしく、大人しく引っ込みませんか。眼鏡一つで人格オンオフできるなんて、狡過ぎませんか？」

この彼らが見ている夢も、また別の流れを持って交じっている。現実では、彼が戸籍を持つ国の王子が風竜を悪魔として召喚して、猫羽の助けにするために夢に送り込んだのだ。

しかし自分の願いで風竜が勝手に動き出して、生け贄枠の王子も今頃困っていることだろう。

「……こいつらの収拾、本当につくのか、猫羽」

もう彼も、何も考えないことにした。

彼にはこの夢が続く方が、おそらく夢なのだから。

回旋曲 ★後日談

平和だったはずの、二学期が終わりました。

紫音や風漓おねえちゃん、それに澪と水月は外に帰りました。水月はまた来るかも、と言ってたけど、水月の姿とは限らないかも。

「……年越し、どうしようかな」

木枯らしのふきつける屋上で、息をついて壁際で待ちます。

もう学園はお休みなのに、今日はわたし、悠夜を呼び出したから。

猫羽さん？ と、やがて心細そうな顔で、学生服の悠夜が屋上に来てくれました。

わたしは心が揺れないように、まず言います。

「……ユウヤ。お別れ、しよう」

園長先生の所に、消えた生徒のことを紫音と一緒に尋ねに行った時に。わたしはあえて、悠夜を一切巻き込みませんでした。

一年D組のミサキは、汐ノ香の人形の姿に。風漓おねえちゃんは春日美咲の姿に、わたしにはずっと見えてます。烙斗と水月は生け贄のヒトと元々姿が近くて、葦津先生達は全く別人で、中身はどちらも普段は葦津先生でも、わたしには父さんと母さんが見えてました。

わたしの直観だと、そこにいる夢の侵入者より生け贄のヒトの方が見える。

それなのに、悠夜はずっと、悠夜の姿のままでした。ここでは悠夜も、外から来たヒトのはずなのに。

いきなりお別れを言って、びっくりしてる悠夜にわたしは目を逸らして言います。

「この学園で、わたしが覚えられるヒトって、わたしと縁があって……だから、外から来た、さざなみでないヒトだけみたい」

「——……」

「ユウヤ自身は、忘れてるよね。今はまだ、ユウヤは『留学生』だから」

本当はC組で眠ってたわたしが、澪の体で一年A組にいたこと。その意味をわたしも、今日まで必死に推理してたんです。

「A組にいるヒトは、生け贄なしにさざなみと並列して存在ができるダッシュ生……その代わりに、記憶を失ってしまったとしても」

さざなみ学園のクラス分けは、出身別だと前に聞きました。A組は帰国子女や留学生、B組は学園関係者、C組は地元推薦、D組は全国。

B組のヒトは、皆さざなみなんだと思う。会ったことがないから、確信ではないけど。「ユウヤはきっと、故郷からわたしを探しに来てくれたんだよね。日本から生け贄と交換で来た烙印達……D組とは違う。日本では、『全国』って、日本全体をさすんだって」

外から来てる。でも何も覚えてないから、わたしは悠夜に、ここが夢だと言わなかった。わたしも同じで、記憶の大半が無かったしね。

「A組のヒトは、さざなみにとって、異国というほど何かが違うみたい。それなら……」

悠夜はA組で、実際のわたしはC組。でもわたしはA組にいた。学年は違っても、悠夜と同じ「異国者」扱いだったわけです。

汐ノ香は逆で、悠夜と同じ三年A組だった記憶があるのに、チルダの名簿では三年C組。

つまりここには、わたしがAで汐ノ香がCの今までの夢と、わたしがCで汐ノ香がAの逆の夢がどちらも存在してる。多分、わたしがCである夢に、水燬という鬼子は存在してた。

「わたし、ユウヤとは違う世界に棲んでる。ここはこれから、どうなるかわからないから。ユウヤは自分の世界に、帰った方がいいよ」

悠夜も外で昏睡してる。風漓おねえちゃんの夢が終わったから、ここは変わるはずです。

「だからユウヤ、お別れしよう。みんな絶対、ユウヤのことを心配してるよ」

声に涙が滲みそうになるのを、必死に我慢します。今まで悠夜がこの学園にいてくれて、わたしは本当に幸せだったから。

悠夜はどうして、こんな夢まで来てくれたのかな。C組の地元推薦枠って、何なんだろう。わたしも汐ノ香も、どうして変わるんだろう。

しばらく沈黙が続きました。記憶はきっと戻ってないけど、悠夜は靈感が凄く強い神童だから、わたしの言うことは理解できてる。

直観でおぼろげに、わたしを助けたくて夢を受け入れたことも伝わってきました。沢山の縁談から逃げたい、それだけじゃなくって。

それから悠夜が、やっと口を開いた時には、思っても見ない方に話が向かいました。

「……僕は確かに、足手まといです」

「——え？」

「ここでは僕には、力もほとんど使えません。何が起きているか、感知できない。元々、眠りにつく猫羽さんを助けられなかった僕は、今後も足手まといにしかありません」

え？ 何それ、だから自分がいるべきではないのはわかってるとか、どういうお話？「猫羽さんは、烙印さん達とここに残って、これからどうする気なんですか？」

ぼかん。としてたわたしは、言いたいことがまとまらずに、慌てて質問にまず答えます。

「わたしは、起きようと思えばもういつでも起きられるから、落とし物を探しにいくの」

「.....」

「わたしもラクトも欲張りなの。何かあればみんなが、ユウヤが助けてくれるって当てにしちゃってるから.....だから、ごめんなさい」

本当に一杯、悠夜には心配をかけたんだと思う。悠夜が戻れば多分現実では、わたしのような危険物には関わらないようにされるね。

それでもまだ無傷で帰れる内に、悠夜には戻ってほしいから。哀しそうに背中を向けた悠夜を、わたしは引き止めませんでした。

「さよなら.....ユウヤ」

そうしてわたしの、夢の旅が始まります。

雨が降れど槍が降れど D+

☆序奏

いったいどうしてこんなことに。

荒涼とした砂漠の一画、凍えそうに冷え込む闇のオアシスで、山科^{やましなつばめ}燕雨は何故自分がそこにいるのか改めて嘆いた。

暗い水面に赤く映る影の前で、彼らをここに連れて来た「辰」という機械人形が、いつも通り偉そうに胸を張った。

「それではいいですか、山科燕雨。必ず我が君を連れて戻って下さい。貴男の役目はそれ以上でもそれ以下でもありません」

わけあって今は迷彩女戦士風の「辰」に宿っているが、声は橘^{なぎ}水葵という同僚の化け物。燕雨も最近仕える約束をした「翼の悪魔」の手下が水葵で、水葵は燕雨の妹を見守りに人間界に行ってくれていたが、奇妙な報告を持って「辰」の体で帰ってきたのだ。

燕雨と翼の悪魔を水葵は、炎獄^{ゲヘナ}という世界の果てに送るために、この魔界の片隅の黒いオアシスに連れてきた。

翼の悪魔は学生服で、入口である小さな泉をしゃがんで覗き込んでいる。楽しいが背中に水葵が苦い顔で続ける。

「いいですか、我が君、くれぐれもお帰りになって下さい。どうせ貴方のことですから、もしも炎獄で汐^{しおのか}ノ香を見つけたら、場合によってはそのまま居ついて帰らない気でしょう」

翼の悪魔が長年探す相手。水葵の本来の主である「漣^{きざなみ} 汐ノ香」に出会ったという水葵は、現状汐ノ香の代わりに翼の悪魔を守っているようなものだった。それなので口酸っぱく言う水葵に、翼の悪魔は振り返りもせず、不誠実な軽い声を返す。

「え？ さあ、どうだろうね。そもそもゲヘナって、一度入ると出られるものなの？」

前途多難。燕雨はそう思わずにはいられなかった。

水葵には必ず、翼の悪魔を連れて帰れ、と言われている。仕えることを決めたばかりの燕雨に対して、そのための同伴依頼だ。

しかし翼の悪魔にはさっぱり現世に執着がない。帰れなくても何も構わない様子で、燕雨もついてこなくていい、と何度も言った。それでは絶対入口に案内しないと水葵が言うので、しぶしぶ四人で来たわけだった。

残りの一人、中学生ほどの少女の「凧」という機械人形を使う「天使の凧」が、水葵^{水葵}の後ろでくすくす笑った。

「出ようと思えば簡単だけど？ だから一応さざなみのあたしも、ここにいて話ができるわけだし」

「凧」は炎獄に接する黄泉に常在する、「さざなみの使徒」らしい。凧人形の中身の天使は、燕雨には義理の祖母にあたる。自らの体を捨てて天使となるため漣に雇われたといい、水葵だけでは炎獄の扉を開けないのでついてきた次第だった。

炎獄からは簡単に出られると言う「凧」に、水葵の「辰」が心底苦々しげな顔を向ける。「凧、貴女とて、己の一部を切り離してその人形を遠隔で動かしているだけでしょう。簡単に甘い展望を述べてもらっては困ります」

「えーん、水葵ちゃん厳しー。同じ名前^{なまえ}のよしみはどこにいー」

「とにかく燕雨、わかりましたか。最終目的は汐ノ香の回収ですが、元々漣を名乗る以上、汐ノ香も炎獄の使徒となった可能性が高い。炎獄は魔界の更に奥でありながら、管理はさざなみたる天使が行います。それを引き戻すのは容易ではなく、今回は現状確認ができれば上々と思って下さい」

黙って状況を観ることしかできなかった燕雨に、後ろから翼の悪魔が肩を掴んで笑いかけた。

「そんなの面倒くさいじゃんね？ 燕雨だって早く^{つぐみ}鷺ちゃんと^{キラ}水燬の所に帰りたいだろうし、ほんとにここで帰る気はないの？」

それは燕雨も、散々悩んだ。かつて巻き込まれた天の事変で関わった「漣汐ノ香」が、翼の悪魔の元から消えたのが燕雨の責任でなければ、日常を捨てる覚悟でここまで来なかった。

「……俺がアンタを殺したせいだろ？ 汐ノ香が消えたのは」

「あーそれ、やっぱり気にしてたんだねえ。猫羽ちゃんもだけど、殺し合ったのはお互い様なんだから、どっちが勝ったかだけの違いなのねえ」

そもそもの始まりは、燕雨の妹の猫羽が、悪魔に囚われていた頃に^{みずき}水燬という少年を殺したことだった。翼の悪魔は甥っ子の水燬を取り戻すため、猫羽を使う悪魔達にかしずき、猫羽を探す燕雨や、そもそも悪魔と戦う天使である汐ノ香と敵対してしまった。

汐ノ香は天の宝の番人だった。本来その「鍵」である翼の悪魔と、可愛がっていた水燬を助けようとして、天使の羽を捨てることになる。翼の悪魔と敵対した燕雨が翼の悪魔を殺した時、天使の羽を翼の悪魔に埋め込むことで蘇生させて、汐ノ香自身は闇に消えた顛末だった。

「そんなん気にしてたら、多分さざなみの思うツボだよ。せっかく水燬も復活したんだから、オレとしてはそっちを守ってほしいんだけど」

燕雨もそれは痛いほど思った。今の水燬は、かつて燕雨を助けてくれた親友キラの魂を受けてこの世に戻っている。キラの頃の記憶もいくらかあるようで、もう一度会いたい、話したい、とどれほど思った相手であるか。

けれどそれは、あくまで私情だ。燕雨にとって大事なことは、誰かと約束した仕事を必ず遂げること。それはキラが一番よく知っているだろう。

そもそも燕雨には他人事ではない。漣汐ノ香と名乗る者が人間界に現れ、猫羽を昏睡に追い込んだ事件が発端なのだ。またいつ同じことが起きるかわからず、翼の悪魔まで敵に回ったらどうなる、という思いもなくはない。

汐ノ香が消えたのは燕雨のせいだ。だからつい数カ月前、孤高な翼の悪魔に力を貸すと告げたばかりで、別にいい、と逃げ回る翼の悪魔の元で、体を鍛え直していた矢先の事件だった。

そうしたわけで、燕雨も翼の悪魔も利害は一応一致するが、足並みで言えば全く揃っていない。そのことを見透かすように「凧」が笑う。

「まあ、お互いを監視しなきゃ危ないわよね、燕雨くんも氷輪翼^{ひわよくる}も。漣汐ノ香の出方次第で、たとえば猫羽ちゃんを生け贄に差し出せって言われたらどうするの、二人共？」

もしもそれでしか汐ノ香を助けることができなかった場合、翼の悪魔はどう出るだろう。燕雨も猫羽と翼の悪魔、どちらを優先するのか、仕えたと決めた相手を裏切ってよいのか、大きな問題がある。

しかしその辺りに関しては、翼の悪魔は至って楽観的に観えた。

「そんなこと言うなら、それはもう汐ノ香じゃないよ。どの程度^{はくや}白夜に侵蝕されてるかだけど、そっちを解除する方法を考えないとね」

「……じゃあ、アンタはそういう場合、猫羽を守る気なのか？」

「お前はむしろどうするの、燕雨。猫羽ちゃんを差し出せばオレが助かるとしたら、オレのために差し出すっていうの？」

勿論燕雨としては、まずそんな選択を課されること自体に抗う。翼の悪魔もそれは同じようで、ただどちらにしても、先行きが不透明であるのは避けようがなかった。

もしもそうして、互いの大事なものが本当に関わってきた場合——その時彼らは、自身と相手を裏切らずにいられるのだろうか、と。

一般的に、魔界には太陽がない。二十年以上前の天と魔の戦いの際、表層には太陽光が届くようになってしまったというのが、今いる場所は最深部に属し、冷たいだけの闇に包まれた世界の果ての黒い泉だ。

往路は「凧」が扉を開く。復路もまた「凧」の気を辿って帰ってこい、と水葵が燕雨に言う。

「燕雨の剣には凧の『天気雨』を填めているでしょう。それで帰れるのも凧のいる黄泉までだとは思いますが、そこへの迎えは蠅^{はえ}の悪魔を行かせますので」

「あはは、アッシュったら、かわいそー。この件ではもうこき使われっ放しー」

所定の時間が来たらしく、「凧」が両膝をつくと、泉に小さな片手^{ひた}を浸した。「火の深遠よ、開け」と、受難の祈り^{うた}を唱い始める。

今までとは裏腹な静かさでかばそい声。それと共に、泉を始点に玉の膜を剥がしていくように、半径五メートルほどの周囲の暗闇が、赤い炎の壁へと一瞬で変わった。

「ひゅー。これは凄い、たかが『天気雨』、ってバカにしたもんじゃない」

翼の悪魔が感心する通りに、泉の周囲を火天に変えた「力」は、泉を保ちながら炎獄の火の池を再現できる水火両用になる。

燕雨も水と火を併せ持つ矛盾した化け物だ。そのために「天気雨」をお守りにくれた頃の凧は、もう少し温かい顔で笑っていたのを思い出した。

炎の壁に囲まれたような場で、以前の凧を思い出したせいだろうか。あまりに赤い世界の中で、記憶の凧が笑った気がした。

——今の君には、それは特別、必要のないものだけど……。

あれ、と、燕雨はふっと大きな違和感を覚えた。

己の宝の剣の柄に填められた、凧のヒト時代の形見。狐火玉^{きつねびだま}という「天気雨」の媒介と本体の「力」と、もう一つ託されたものがあつた。

——君が持ってて。もしも『彼』が、その世界を望んだ時のために。

その時の燕雨は知らなかった。燕雨の内には凧の悲願、誰かの命の蒼い残滓も息づいていることを。

一瞬、思考が止まってしまった燕雨の方に、炎獄の扉を開き終えたらしき「凧」が振り返っていた。

「それじゃ、行ってらっしゃい、二人共。行きは良い良い、帰りは怖い？」

悪魔のように整う笑顔。燕雨の目にはそう映ったが、「凧」はすぐに邪念を引っ込め、赤く染まった泉を背後にいたいけな微笑みを浮かべる。

そのまま泉に燕雨から先に入った。翼の悪魔がやれやれ、という顔で続くのを、二人の「なぎ」が見守っていた。

そして彼らが消えた後に、難しい顔の「辰」に微笑み、「凧」が軽く言い放ったことを彼らは知らない。

「大丈夫よー、どの道あの子達、炎獄ルートは避けられなかったし。少なくとも燕雨くん一人は、どんな形であれ帰ってくるわ」

「……な？」

「凧」には過去や未来に近い、「違う道を辿る時空と現世の差異」を夢に視る特性がある。それは炎獄の凧や預言の夢から流用している力というが、こうして大事なことを知っていても教えず、己の望む方向に誘導しようとする、と水葵は伝え聞いていた。

「貴女と言う人は、また……！」

そして彼らの「選択」が、ここから始まる。

＊

☆選択

炎に囲まれながらも冷たい泉に入り、燕雨の世界は反転したかのように、飛び込んだはずが水面から勢いよく上半身が出た。

魔界には慣れている翼の悪魔も、その先の「炎獄」は初めてだといい、燕雨と同じようにぎゅんと顔を出しながら淡々と感嘆していた。

「わー。ゲヘナは奈落の底っていうし、もっと暗いの想像してたのにな？」

彼らが現れた広めの泉は、一見普通の山中に見えた。太陽は見えないが曇天の昼間のように光がまばらで、先程までいた魔界の方が余程暗黒感がある。

「まあ、山を下りたら無限の荒野っぽいね。その辺は聞いてた情報と一緒に」

「でも光は魔界よりもあるんだな。火の池っていうから、むしろ明るい？」

『『暗黒の太陽』を司る天使が管理者だしねえ。そもそも炎獄自体、魔界に追放するでもなく、混沌に還すのでもなく、都合の悪い存在を押し込めておくゴミ箱だから」

それはつまり、生者と死者の境も曖昧のまま、永遠の猶予期間を過ごす行き詰まり。

死者の通り道である彼岸で、生まれる直前の生者も現れる黄泉にもそういった両在はあるが、黄泉では生と死は確と分けられている。

要するに、何も選ばず、何にもならず、世に在れば害とはなるが悪魔ほど明確でもなく、取り扱いに困るもののたまり場が炎獄らしい。

「.....つまり、昔の俺みたいな奴が、行く場所ってことか」

『『山科燕雨』になる前のお前？ まー、近からず遠からず、なイメージ。オレも実際のところはよく知らないけど、お前は確かに、生粋の罪人でも化け物でも生き物でもなかったからね」

ぶらぶらと、まずは泉の周囲を歩き回ってみる。ここから何処に向かえば、漣汐ノ香の情報を得られるかが全くわからない。

それでも炎獄に侵入しただけで重罪なので、待っていれば何かがくるだろう、と翼の悪魔は呑気だった。

「だから橘診療所の院長なんかは、橘^{とうか}桃花の体とかもそうだけど、リサイクルできる奴を採しに炎獄に来るって一んだから。炎獄は時空すらくそみその掃き溜めらしいから、本来存在しない奴を持ち帰ったりすると、炎獄を出てすぐに消えるんだって」

「そんなことしてるのか、あのヒトは.....暇なんだな」

橘診療所の院長は、燕雨にとっては複雑な縁戚だ。妹の猫羽は院長の実の娘である桃花の死骸を使わせてもらい、ヒトの世に戻って来れた。そういう意味では既にとっくに、燕雨も猫羽も炎獄に関わっていると言える。

そうやって、世間話をするくらいしかないでいた。しばらくすると、薄暗い山の泉に、かすかに白い霧が立ち込め始めた。何処から来たのかわからない地上の雲が、足元だけをまばらに覆って隠してしまう。

「お、来たみたいだね。さてさて、鬼が出るか、蛇が出るか？」

彼らは泉がすぐに見える、草のない水際にいた。泉を背にして山林を見つめる彼らの方に、やがて森の中から近づく人影が見える。

さわさわと、足音をほとんど立てずにやってきた者。その姿がはっきり観えるようになった時点で、燕雨は早速動揺する醜態を晒してしまった。

「——って、え……！？」

「——ありゃ。何で——猫羽ちゃん？」

現れたのは紛れもなく、人間界でのバイト時に着る受付服の猫羽だった。

猫羽の命、「桃花水」の鎌も、それをしまうスマホも持っていない。無表情に手ぶらで近付いてきた猫羽は、霧に取り囲まれながら、黙って彼らを見つめて立ち止まった。

「……何で、猫羽がここにいるんだ？」

「……」

今も人間界で、元気に高校に通っているはずの妹。一時期は自ら体を捨てかけ、今でも危うい一面はあるものの、燕雨に頼まれたキラや、他にも様々な者が見守ってくれているはずの猫羽。

翼の悪魔は何も言わずに、無機質に猫羽をじっと見て検分している。

猫羽はそこで、要領を得ないように首を傾げて、いつもは決して聴かせないような心細い声を憂いの顔で発していた。

「……わたし達を、探しに来たんじゃないの？ 兄さんと、氷輪くん」

「——え？」

「ごめんなさい……わたしも汐ノ香も、帰れないから。兄さんも氷輪くんも、心配せずにここから帰って……向かう道は、ラクトが教えてくれるから」

猫羽がかぼそい手を掲げる。そこに赤い光が現れ、燕雨に何故か更なる冷感が走った。

ちょっと待った、と。冷たい声で翼の悪魔が割って入った。

「それはオレ達のいた世界の猫羽ちゃんじゃないよ。燕雨にもわかるでしょ？ 消えた猫羽ちゃんは、悠夜君が連れて帰ってくれた。それならここにいる猫羽ちゃんは、『猫羽ちゃんが帰らなかった場合』……それだけだよ」

「——へ？」

燕雨にはよく理解できないが、翼の悪魔が言いたいことはわかった。

つい先刻に、炎獄とは時空もくそみそだと聞いたばかりだ。本来存在しない者も、そこには有り得るのだと。

「可能性さえあれば、何でも再現されるのがここだよ。オレと燕雨をここで帰らせれば、この猫羽ちゃんには何の得があるのかな。大事なものは多分、そこだと思うけど」

翼の悪魔の言い分を、猫羽は無表情のまま受け止めている。

その手に赤い光をまとわせたまま、やがてにやり、と不敵に笑った。

「——！？」

今度は翼の悪魔の顔色も変わった。何故なら猫羽の顔付きが、燕雨の直観でもわかるほどに、見た目は猫羽なのに翼の悪魔のようだったからだ。

気配の変貌を感じた通り、猫羽が翼の悪魔と同じ声色に変わった。

「さすがは翼^{オレ}樞だね、ゲヘナのことなんて何も知らないくせにね。このまま烙^{らくと}鍔を連れて帰ってくれば、猫羽ちゃんが消えた世界に出られて、世界はまだしも自然な流れに戻っただろうに」

手元を離れた赤い光が、猫羽の周囲を衛星のように舞う。

悪意しか感じられない、悪魔猫羽の声。燕雨は炎獄の扉の泉に入る直前の、風への違和感を思い出した。

「ラクトって……その赤い光が、ラクトなのか？」

風から以前に、「君が持ってて」と言われた残滓。彼の灰の火酒には今でも燕雨を助ける魂が残り、燕雨にとっては叔父で、翼の悪魔にも師匠な者が烙^{ラクト}人だ。八年前に体が滅んだ烙人の力を「白鍵」として、命の残滓を引き受けたのが燕雨だった。

「それはわかるけど、猫羽ちゃんが消えた世界が、自然な流れってどーいうことさ。オレ達がわざわざ、そこに戻りたいとでも？」

翼の悪魔は、猫羽がちらりと口に出した、本来の探し人である汐ノ香のことをきかない。燕雨の動揺を優先していると観えて、胸が痛くなった。

悪魔猫羽は子供っぽく笑い、後ろ手を組んで体全体を傾げてみせる。

「だから、燕雨が烙鍔を連れて帰って、オレは猫羽ちゃんと汐ノ香とここに残れば解決でしょ。それが本来、そうなるはずの運命。猫羽ちゃんのためであれ汐ノ香のためであれ、オマエ達はどの道ここに来るんだ。オレが猫羽ちゃんに見えるってことは、それが一番自然な未来なんだよ」

ここに残れば全て解決。翼の悪魔は必ずそれを望む。汐ノ香がもし本当に炎獄にいて、そこから出られないさだめであるのならば。

それは水葵からも翼の悪魔が言われていたことで、そうさせないために燕雨がついてきた事柄なのだ。

しかしどうして、燕雨が烙人を連れて帰る必要があるのか。先程から「らくと」のニュアンスが微妙に違い、ここという烙鍔——烙人の蒼い意志は、既に燕雨の内に息づいているはずだ。わざわざこの場で、悪魔じみた猫羽から赤い光の鼓動を託されなくとも。

それじゃ、と翼の悪魔気配の猫羽が、また一風違う雰囲気ですら笑った。

「ここで重要な質問です、氷輪翼樞。君が探しているものは、人間の女の子ですか？

それとも天使の女の子か、悪魔の女の子か」

「……——」

「君のこたえ次第で、未来が変わる。山科燕雨も、こたえはわかってるでしょ？」

「——って」

燕雨の背筋が、ぞくりと冷えた。やはり彼らのずれを見咎められた。おそらく猫羽の皮を被る炎獄の使徒が、侵入者を追い返すための問いかけ。

翼の悪魔が探しているのは天使だ。そこには嘘はつけないだろう。せめて何も答えないことで、相手のペースに完全に寄せられるのを避けている。

けれどこたえは明らかで、それを前提に悪魔猫羽は燕雨に問い直す。

「山科燕雨。君が選べるのは残りのどちらか。二人共が一人ずつを助けられるなら、こたえはどちらも決まってるよね」

「答えちゃダメだよ、燕雨。こいつの出方に合わせる必要はないんだから」

翼の悪魔が「天使の女の子」を選べば、燕雨は猫羽——「人間の女の子」を当然選ぶ。しかしそれでは、「猫羽が消える世界に帰る」が自然な未来、という話が合わない。それでは猫羽を助けることにならない。

確かにこの場で、迂闊に何かを選びはできなかった。目前の猫羽が悪魔の気配なことを含め、殺戮の天使と呼ばれた悪魔使いの猫羽を、単純に「人間」分類してはいけないのかもしれない。天使にも悪魔にもなり得る人間の少女、それが猫羽であるのだから。

黙り込んで、睨み合いを続ける。状況は悲しい程に、何も動いてくれない。

それでも当然、相手の方が炎獄初心者の彼らよりも上手だった。

「じゃあ質問を変えようか。言葉で応えなくても、行動がこたえになること。山科燕雨——君は氷輪翼轡を置いて帰るか、帰らないか」

冷ややかな紅が差す猫羽の目に、ぎくり、と冷汗が流れた燕雨が映る。

翼の悪魔も顔をしかめる。それはもう問い立てではなく、強制返答を得る卑劣な手法で、この場で燕雨が帰らないなら「帰る選択を捨てた」こたえになってしまう。

それを選べば、翼の悪魔の運命が変わる。置いて帰らないと決めるのであれば、最悪翼の悪魔の望みを無視することになる。

翼の悪魔は何処であっても、紅い瞳の天使といられることを望むだろう。

その望みを否定するか否かが、結局燕雨にかかっている——

→置いて帰らない

次項「D+」へ

→置いて帰る

(<https://xfolio.jp/portfolio/sky/works/5527118>) ※ 2026/3/13UP 予定

★D+

翼の悪魔にとって、これは普通に想定内の結果だった。

燕雨がどうしても回答を避けるならば、その場で自害でもすれば保留にできたかもしれない。翼の悪魔を置いて帰るとも、帰らないとも示せる状態でなくなることだ。行動不能になってしまえば、「行動による回答」も打ち消せる。帰れない状態に自らなったことを、「帰らない意志表示」ととられるかもしれないが。

炎獄とは様々な可能性を内包する無秩序な場所だ。だから逆に、一つのこたえに何かを絞らせるのは難しい。そして絞らせることこそ、炎獄への侵入者を秩序の世界に戻す当たり前の手段だと観えた。

しかしそこで、燕雨に選択の責任を課す気は、翼の悪魔にはなかった。

「もういいよ、オレが選んだ方が早いでしょ。オレは汐ノ香を探しに来て、本当に帰れない状態ならここに留まる。お前達が望む回答はそれだろ」

「——」

燕雨の選択を判断される前に応える。思えばそれを促すために、燕雨に仕掛けられた罠だったろう。

それでも翼の悪魔は罠に乗った。それが一番手っ取り早く、求める情報を得る方法でもあったからだ。

「それならお前も答えるよね？ 汐ノ香が今、どういう状態なのか。それでなければお前の問いかけへ、オレのこたえも成立しないんだから」

こうなることは水葵の忠告で解り切っていたのに、何も止められる方法がなかった。隣で燕雨がそうショックを受けているのが可笑しい。

燕雨はいつも、わかりきったことを直観でわかっていながら、直面するまでは本当にわかっていない不思議さがある。翼の悪魔には予定調和とも言えるこの場で、まだ何か違うこたえを探そうとしている。そうなることもわかっていたので、一応最初は少し抵抗して見せた翼の悪魔だった。

猫羽の姿をした問いかけの主は、翼の悪魔のこたえに柔らかく微笑み手を差し出した。

「ありがとう、氷輪翼。これで悪魔のキリは人間のカザリになれるし、漣汐ノ香の欠片はシオンとして、猫羽とわたしと一緒に解放される」

「……？」

翼の悪魔には覚えのない名前の数々。それらのためになる気は別にはないのだが、それが汐ノ香のためになると、口調の変わった相手は言いたいらしい。

「アナタがここに残ると選んだから、人間も悪魔も天使も帰っていける。猫羽が目覚めるのは当分先になるでしょうけど、紫音と風漓はきっと猫羽を呼び戻すから」
「.....お前.....橘、桃花？」

猫羽の姿をした炎獄の使徒。何故か話したこともない相手の名が浮かんた。
その直感は正しかったようで、悪魔猫羽の目元が緩む。

翼の悪魔にとって「橘桃花」とは、霊魂しか残っていなかった猫羽に己の死体を与え、この世に戻した橘診療所の娘だ。猫羽と翼の悪魔が契約していたのはそれより前で、猫羽が世に戻れたから契約が終わった。

既に死していた橘桃花と話をしたことはない。強いて言えば、燕雨と猫羽の現在の養母が検流で、それは桃花の魂を引き受け、胤の体を使う悪魔。そうした「橘桃花」の事情を知っているくらいだ。

橘桃花の名を出した翼の悪魔に、燕雨が更に面食らっている。
「え、こいつ、猫羽そっくりなのって、母さん橘桃花だから？」

くすり、と。つい数分前までは、翼の悪魔のような口調で喋っていた猫羽が妖艶に笑う。

「半分当たりで、半分ハズレ。わたし——オレは、これから冬花紫音になる。そのためにアナタの血が欲しいの、氷輪翼トウカシオン」
「.....？」

「それと、アナタが汐ノ香から託された天使の羽を渡して。それを失えばアナタは動けなくなり、本体は天の宝を守ったまま、炎獄から出られなくなる。それでも代わりに、アナタの血と汐ノ香の羽を継ぐ、御使いの『シオン』が外に出られる」

翼の悪魔は一瞬、まいったな、と眉をひそめるしかない。

相手はまだ肝心の、「汐ノ香がどうなっているか」を答えていない。それでも翼の悪魔が興味をひかれる条件を提示してきた。それに乗るのか、相手が隠す汐ノ香の現状をあくまで聞き出すか、采配一つでおそらく今後が変わる。

その判断を下すのはもう少し先にした。それなら、と隣で難しい顔をしている燕雨に保険をかける。

「だってさ、燕雨。ちょっとこいつらの話聞いてくるから、お前が嫌でなければ、しばらくここで待っててくれる？」

「——！？」

「オレがいつまでも戻らなければ、お前は一人で帰るといいよ。待ちたければいつまでも待っててもいい。だってお前、オレを置いていくか、まだ決めてなかったものね？」

再び同じ罠にはめられる前に、翼の悪魔はその約束を定義した。

いつまでも待つか、一人で帰るか、「しばらくここで待って」決めていい。「しばらく」がいつまでであるかは定めない。

これを口にしておけば、「すぐ決めないなら帰らないという意志表明」にはならない。燕雨に納得がいくまで考えてもらうことができる。

翼の悪魔の言いようを見て、たはは、と悪魔猫羽が笑った。
「本当に先延ばしが得意だね、二人共。オレはかまわないけど、燕雨はあっそう苦しいだろうね。ご愁傷様」

悪魔猫羽の言うことはわかりながらも、燕雨のことは振り返らずに、猫羽の小さな手を掴んだ。今はもうそれ以上は、翼の悪魔にしてやれることはない。

選択の責任を一旦引き受けたが、それで納得できる燕雨でもない。かといってここで決断を迫るのは酷だろう。情報不足過ぎて、まず判断材料がないというのに。

炎獄に来たのは翼の悪魔の都合だ。だからこのまま、燕雨がどちらを選ぼうと、翼の悪魔も自身の選択を揺らがせる気はない。

いつまでも待つなら待っていればいい。翼の悪魔が帰ることはないが、燕雨がそういう無謀な忠誠を示しかねないのは承知の上だ。

まだ仕えると言い始めたばかりなのに、本当に変な奴。燕雨の申し出から逃げ続けていた翼の悪魔にとって、これはその現実の延長に過ぎない。

悪魔猫羽の手を取った瞬間、周囲の風景は山中の泉から全く違う場所へ変わった。

単身用のマンションであるが、二人でも住めそうな1LDKの広さで、家具もいくらか備え付けてある白い壁の部屋。猫羽が人間界で借りたはずの下宿へ、翼の悪魔と猫羽は瞬時に移っていた。

「氷輪^{みづき}水月。オレがシオンになるなら、オマエの居場所はそこしかなくなる」

「.....？」

猫羽の紅い目が見つめる翼の悪魔は、水燬の姿で映っていた。どうやら翼の悪魔本人として、この部屋に訪れたのではないらしい。長年助けたかった水燬の体を、翼の悪魔が生かして動かし、水月と呼ばれている状況がわかる。炎獄に来る前には魔物寸前のキラとして、違う方法で目を覚ました水燬なのに。

「オレも実際、『冬花紫音』としてしか世には関われない。本当のシオンはただ在るだけで、オレはその影、シオンとして生きようになるトウカ。でもそうすれば汐ノ香の羽も、風漓が生きる道も、猫羽ちゃんが目覚める可能性も、全てをこの世で活かすことができる」

何が何だかわからない話に、黙って翼の悪魔は床に座る。

悪魔猫羽——シオンと名乗る橘桃花もベッドに座り、九月のカレンダーがかけてある壁に大きな紅い目を向けた。

「炎獄にいるヒト達はね。汐ノ香もそうだけど、現世にある何かを覆い隠さないと、この世に出てくることはできないんだよ」

「……？」

「汐ノ香と風漓、猫羽とトウカ。追放されたこの四人が悪神の戯れ——タニウツギの神器で、炎獄から打ち寄せるさざなみとなった。たとえば汐ノ香はオマエを、風漓は猫羽を、猫羽は橘桃花を、トウカは流惟を隠さないと、存在できないと言えбайい？」

「……橘桃花と、トウカって、別？」

今も話はわからないが、とりあえず炎獄にもしがらみがあるのは伝わる。それはどの世界でも、死者は基本帰らない理と同じくらいに当然の話だろう。死神をしていた翼の悪魔には察しがつく。

「この四人には共通点がある。誰もが今の心の、体を失った死者だってこと」

「……」

「オマエはそれを、葬送する側でしょ。烙人の中にいる霧の精霊——風漓も、悪魔と契約した猫羽ちゃんも、オマエは死神の力を預かってるのに見逃してきた。その葬送の鍵をオマエに預けたのは、汐ノ香でもある」

それは全て、シオンの言う通りで言葉が出ない。色んな世界のひずみを見逃してきたら、そのツケが回ったのが汐ノ香だと言いたいのだろう。

「それじゃ、オレがどうにかなれば、汐ノ香は炎獄から出てこられる？」

「記憶はもう、白夜に食われてるから無理。力——心は何とかできる。汐ノ香の羽に猫羽ちゃんの『桃花水』を、聖母の命で纏めれば紫音っていう月光の天使になれるよ。結局それをやるのはオレ、トウカだけど」

何だそりゃ。話が違う、と呆れてみせると、困ったように笑い返される。

「ここではオマエは、完全には消えない。汐ノ香を回収できる流れもあるみたいだけど、その条件はオマエがいないことで。オマエの意志があるままで、以前通りの汐ノ香に会えるところは存在しない」

「——……」

「お試しだけど、紫音に会ってみてから考えたら？ 橘桃花の体の、猫羽ちゃんと風漓が具現主でさ。ひとまず汐ノ香の羽に『桃花水』を借りてまわせば、オマエの姿で汐ノ香みたく突っ走る、月属性の天使ができるよ。可愛いよ」

言い終えると、猫羽だった姿が急速に黒い影に包まれていった。

黒い影は凝縮し、やがて闇色の卵を割ったように、陽気な声でその「月光の天使」は姿を見せたのだった。

「——こんばんは、死神ちゃんでっす！」

月白の髪を右側で一つに束ね、黒いダッフルコートを着込んだ、水葵と同じ顔の少女。

水葵の顔は翼の悪魔と同じなので、要するに自分の外見が少女化した「月光の天使」。満面の笑顔が近年見なかった自分の緩さで、ああ、これは……と、翼の悪魔は観念することになった。

「……ああ、うん。確かに……可愛い、シオン」

もしも彼が人間であれば、親になった時にはこんな気持ちなのだろうか。
思わずそんな気分になる。自分でも珍しい、と思わざるを得なかった。

まいったな、と。水月の体である翼の悪魔は、元気よく立ち上がった紫音の前で、あぐらをかいたままで頭を抱える。

「水葵が待ってるんだけどな、元の世界で。あいつ、汐ノ香が戻れるなら使ってほしいからって、水葵人形の体を探さずに『辰』に移動してんだから」

「それはゲヘナを甘く見過ぎじゃないの？　今回猫羽ちゃんの件で一時でも外に出られたのは、白夜として行動できるからだよ。汐ノ香自身はとっくに消えてるって、みんなわかってたでしょ」

同じ床の上に膝をついて、猫のような体勢で紫音が翼の悪魔を覗き込む。

翼の悪魔と確かにそっくりなのだが、自分ではない。汐ノ香ともかなり違うが、それでいて同じ気安さを感じる全体像がまさに反則。

翼の悪魔としては、汐ノ香をとにかく外に戻るのが一番の望みだった。そのために自身が炎獄にいない必要はない場合、諦める覚悟はあった。

何処かで思っていた通り、二度と会うことができないのなら、果たして自身が炎獄に留まる必要はあるだろうか。

この「紫音」のために、燕雨をずっと、あの場に置き去りにすべきだろうか。そんな思いがふっと頭をもたげて、それに自分で驚くことになる。

——お前が嫌でなければ、しばらくここで待っててくれる？

あの時咄嗟に、その言葉が出た。確実に罠でしかない謎かけに、愚直な燕雨が何か応えてしまう前に。

——だってお前、オレを置いていくか、決めてなかったものね。

炎獄に来るまでの道すがら、燕雨が迷い続けていたのは明白だった。燕雨にとっては現状、猫羽も守られキラも戻り、翼の悪魔に肩入れしても何一つも得はないのだ。

数か月前に何故か突然、燕雨は翼の悪魔の「鍵」になる、と押しかけてきた。「鍵」の意味を知るかきいても、当たり前だ、と堂々としている。人間で言えば恋人や家族、そうした特別な相手をさして、ほぼ一番大事な者が天の宝の「鍵」になれるというのに。

元々は翼の悪魔が、汐ノ香の「鍵」だった。汐ノ香が消えたことで、天の宝を受け継ぎ番人となったが、翼の悪魔自身には「鍵」に定められるほど特別な相手がいない。だから一人で天の宝を守っていた。

「アイツ……本気で、待ってる気かな？」

思わずこぼれたばやきを聴いて、両肘をついてうつ伏せに寝そべっていた紫音が楽しげに見上げる。

「燕雨を気にすることはないよ。アイツ、烙鍔になるか待ってるかだけだもん」

「？」

「あのままあそこにいれば、燕雨の存在を使って烙鍔が現れる。一人で帰ればまた違うことになるけど、帰るなら帰るで薄情じゃん？」

どうにも紫音は、翼の悪魔の勘の良さをしっかり受け継いでいるらしい。何を考えていたかはお見通し、という蒼い目付きに、何故か疲れてため息が出た。

「だからオレとここにいよーよ。水月になろーよ」

「.....それはともかく、烙鍔って誰？」

烙人——翼の悪魔のかつての師匠と、紫音の言う名はニュアンスが違う。

紫音は何故か少し頬を赤らめ、不満げに見上げながら言った。

「カザリをかばうって決めた燕雨。みんなに愛される猫羽ちゃんの体を奪えば、カザリはどれだけ孤立すると思う？　それが猫羽ちゃんの望みなら、烙人の命を残す燕雨くらい、カザリの味方にならなきゃダメでしょ」

なるほど、大体合点がいった。ここはやはり猫羽が消える世界で、翼の悪魔と燕雨が炎獄に残るとその未来になってしまうのだ。

「.....紫音はそれで、いいの？」

「よくないけどね。烙鍔はあんまり、オレの事はかまってくれないし。オレ、猫羽ちゃんとトウカがベースで、性格は聖母、意志決定は汐ノ香の羽だから、烙鍔に甘えちゃダメって必死に我慢してるの」

それは.....と更に頭が痛くなった。汐ノ香が翼の悪魔を大事にしたほど、おそらく紫音は烙鍔を大事に想っている。猫羽の大事な兄が燕雨で、橘桃花と烙人も並々ならぬ縁があった者なのだから、二人の愛執を継いだ紫音。

紫音は普段、本音を言える相手がそういないと見えた。ごろごろと猫のように甘えてくる姿は、自分と同じ顔でも不思議と可愛い。

もう二度と、やはり汐ノ香に会うことはできない。天使だったから生をつなげていた死者が、その羽を翼の悪魔に渡してしまった時に、それはわかりきった結果だった。

汐ノ香の顔をしたニセモノ。記憶をも知るはずの白夜には会えるだろう。けれどそれより、汐ノ香の羽と力を受け継ぐ紫音——ここにいる天使の方が、共にいれば何倍も安らぐ相手だと思える。

——.....俺がアンタを殺したせいだろ？　汐ノ香が消えたのは。

紫音の言う通り、燕雨に気兼ねする必要もない。勝手についてきて勝手に待っていて、勝手に烙鍔に変わってしまうだけだ。

それより頭を撫でてやると素直に嬉しそうにする、月光の天使の相手をしている方が楽しい。そうした素直さはおそらく猫羽由来で、猫羽も確実に望んだ世界なのだと伝わってくる。

本来天使は映像だけの存在なので触れられないが、この部屋にはカザリの作らしき結界が張られて、紫音が生き物らしくできるようになっている。

……それらが全て、これでいいのだ、と現状維持を訴えてくるのに。

己にそれを、言い聞かせていること。必死に納得しようとしている自身に、翼の悪魔は否応なく気付かされた。

——……アンタさえ良ければ、だけど。俺がアンタの『鍵』になって、アンタの守りたいものを一緒に守るけど。

いやいやいや、と。

この期に及んで、振り払っても振り払っても浮かんでくる面影。

度々息をついてしまう翼の悪魔を、心なしか紫音も心配げに、ちらちらと見やってくる。

——アンタの翼を奪った責任で、俺はアンタに生かされたんだから。アンタもその責任を取れよ。

そんなの知るか、と今でも思う。燕雨自身が言った通りに、それで汐ノ香は翼の悪魔を助けるために消えてしまった。燕雨のことを恨む気がないのは、翼の悪魔の心が昔から何処か欠けているからだ。

わざわざ翼の悪魔が責任を取らずとも、燕雨の生存を望む者達は沢山いる。燕雨は孤高でも無援でもない。ただその心がとても空虚で、冷たい空洞を自分になく温かさで埋めたいバカであるだけなのだ。

たとえばそれは、自らのせいで大切な相手を失い、孤独に過ごす悪魔の力になりたいと願うように。

何故かとても疲労を感じて、気分転換に洗面所に顔を洗いに行った。

鏡に映っている悪魔は、水燬の銀髪とひたすら赤い目。翼の悪魔の本体はどうなったかがわからないが、それで水燬の体が生きているなら良いこと。

「……要するに……『葬送』を捨てて、ただの悪魔になったんだ、オレ」

「葬送」の力はそもそも、天使の汐ノ香から借りていたものだ。天使の仕事の一つに死者の葬送があり、汐ノ香は私情で死者を見逃すことはできなかったが、翼の悪魔は死神として好きなようにその力を流用していた。汐ノ香の羽に納めていた祈りの光がその力なので、紫音に羽を渡して力を失くせば死神ではなくなる。

ふっと鏡像が、青銀の髪の死神に変わる。

翼の悪魔の本来の姿。紫音と同じ月白の髪に蒼い目が、彼らの祈りを訴えかけてくる。
——どう？ 紫音、可愛いでしょ？

「……ああ、そうだね。でなければ、自分の女装姿なんて殺したいしね」

ここにるのが、紫音が出るまで話していた「シオン」だろう。紫音や水月と違い、きっと近い世界に存在できる場所がないのだ。

ただ天の宝を守ってのりくらしと暮らすことと、ここで水月としてのんびり生きることは、翼の悪魔にとっては大差がない。それで少なくとも、紫音は楽しく生きられそうであれば、汐ノ香の形見として守ってやりたい。

気に食わないことがあるとすれば——誰かの、おそらくさざなみの思い通りになっていること。体よく利用されることは、昔から翼の悪魔には多かったので心地良くない。

そんな翼の悪魔の不服を感じ取ったように、鏡の中のシオンが笑った。
——それでもいいんじゃない？ これでオレ達、もう誰も送らなくていいんだから。

何処かで拭えなかった安堵。シオンの言う通りだった。

翼の悪魔はこれまで、死に抗う死者専門の死神だった。死にたくない、と願って手段を選ばない者を終わらせるのは、普通の使者を葬送するより負荷の高い仕事でもあった。

「……あ、そっか。それで言えば、オレだってそもそも……——」

ふと、大事な疑問が浮かんでしまった。

けれど、紫音の明るい顔を見たら忘れるだろう。鏡の死神に背中を向けると、小さなオアシスへ翼の悪魔は帰っていった。

-了- or -please turn over-

-INFOMATION-

ここまでご覧下さり本当にありがとうございます。

本作『暁探偵猫羽とさざなみ学園』が自作二次焚書、炎獄アレンジ第一弾となります。

▼橘診療所シリーズ全編 (予定・非公開の時もあり)

- 0：『黄昏千夜』 (<https://puboo.jp/book/135940>)
- 1：『紅い狐』 (<https://puboo.jp/book/135935>)
- 2：『水晶兎』 (<https://puboo.jp/book/135930>)
- 3：『錆びた鍵』 (<https://puboo.jp/book/135925>)
- 4：『残紅六花』 (<https://puboo.jp/book/135943>)
- 5：『(タイトル未定)』 (<https://puboo.jp/book/135943>)
- 6：『黄泉スズメ』 (<https://puboo.jp/book/135643>)
- 7：『(タイトル未定)』 (<https://puboo.jp/book/135945>)
- 8：『雨燕と時知雨』 (<https://puboo.jp/book/112782>)
- 9：『雀の涙』 (<https://puboo.jp/book/134399>)
- 10：『水中花』 (<https://puboo.jp/book/134583>)
- 11：『迷探偵猫羽のよろず事件簿』 (<https://puboo.jp/book/134686>)
- 12：『雨^{みずあおい}久花』 (<https://puboo.jp/book/113309>)
- 13：『迷探偵猫羽の乙女事件簿』 (<https://puboo.jp/book/134653>)
- 14：『雨が降れど槍が降れど』 (<https://puboo.jp/book/135946>) ※本作
- 15：『ツキモノ -白-』 (<https://puboo.jp/book/134788>)

▼正史も完結しました：(<https://www.novelabo.com/author/4396>)

近況として、2025 は色々あり過ぎました。もう創作の余力はないと思ってました。

橘 14 話の『雨槍』後半では、猫羽に人間としての寿命があることを書いています。これは当時、創作活動を終えていくための風呂敷畳みでした。

しかし今回、猫羽がある意味不老な炎獄アレンジを始めたので、自分は死ぬまで創作するのかもしれませんが。ご訪問下さる方々が命のオアシスです、ありがとうございます。

本作最大の関連作でありながら現在非公開の『ツキモノ-白-』などは、ラクマや Xfolio で一部取扱い。最新作を実験的に載せる Xfolio パスワードも、よければ下記で。

ラクマ (<https://fril.jp/shop/xsky>)

Xfolio(<https://xfolio.jp/portfolio/sky>)

2026.3.13 X@kazari_sou



pic©Hatori

※追加の際は、このページは多分削除されます

猫羽一人称の物語はどのシリーズでも
今後また思い付けば本作に追加します

ハトリさんの猫羽が可愛すぎて、今も作者には描けません。ハトリさん猫羽カラー絵ストックはこれが最後です。

ハトリさん本当に猫羽を存在させてくれて有難うございました。一緒にいるのはハトリさんが作画をされていた『ユメハウシ』という作品の主役の一人です。シリアスあり笑いアリのSF的なファンタジー。キャプションにURLを記載しますのでよければ。



<https://estar.jp/novels/23384629>

暁探偵猫羽とさざなみ学園

著 者 pierrette***

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
